
SiLveR eYeS

朦朧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i L v e R e Y e S

【Nコード】

N 3 1 4 1 L

【作者名】

朦朧

【あらすじ】

俺、坂上 京祐 サカガミ キョウスケは、ある雨の夜に一人の女性に出会う。

そこから始まる、異世界での物語。

覇気、術、能力。

あらゆる力が交差する世界の中、二人で歩む道の先に見えるものは……。

始まりの雨

ある夜、俺は鬱陶しい雨粒をその身に受けながら、天気予報を見なかったのと降る前に帰らなかったことを後悔していた。

コンクリートを激しく叩く雨と、それを照らす外灯。

途中まで走って帰っていた俺だが、ずぶ濡れなると人間、諦めるものだ。

もう、いいや。

そう思っただけでゆっくりと歩いていた。

「はぁ……、お気に入りなのにな……」

悪態を吐きながら、家に向かって歩く。

家まではまだ遠い。

バシャバシャと道路に溜まった水を蹴りながら、ひたすら歩く。

ふと、目の前の暗がりから激しく水を蹴る音が響いてきた。俺と同じ輩がいるなんてな。

明らかに近付いてくる足音を聞いて、俺は確信していた。

傘を忘れ、どしゃ降りの雨を嫌がる誰か。

ちよっただけ見たくもなかった。

「（どんな子かねえ……）」

こういう時、男からすれば女が来て欲しいものだ。

可能性は五分五分。

そんな俺の願いを叶えてくれたのか……。

駆けてきたのは綺麗な赤の長髪を振り乱した女だった。

「かわいいな……」

思うだけに留まらず、つい口に出してしまうほどの美形。
腰の辺りまで伸びた赤髪、整えられた眉にぱっちりとした目元。
透き通った紅色の瞳、通った鼻筋に柔らかさの分かる唇。
振り返らない男などいない。

そう断言してもいいくらいだ。

ただ、一つだけ女性には似つかわしくない物を彼女は持っていた。
外灯にキラリと光る一振りの刀。間違はなく、“日本刀”だ。
夜分遅くに刀を持って駆ける人間。

異質すぎる。

というより、なんかの撮影か？

本物の訳がない。

綺麗な女性だが、声をかけるのは危うい。

そのまま、すれ違おう。

刀を持った彼女を無視すると決めた俺は、ただ歩く。家に向かって、
歩く。

やけにざわつく胸の鼓動を隠すように、冷静な表情で。

「え……っ？ 一般人？」

すれ違い様、彼女は俺の顔を見てそう言った。

澄んだ通る綺麗な声で、言った。

無視すると決めた俺からすれば、想定外だった。まさかあっちから
声をかけられるとは……。

それでも、足は止めない。止めちゃいけない。
なんとなく、負けた気がするからだ。

彼女は足を止め、俺を見ている。
確認した訳じゃないが、強烈な視線が背中に刺さっているのを感じる。

彼女はまだ立ち止まっているのだろう。
なぜ分かるかって言えば、彼女の足音がしないからということだからだ。

それ以前に、未だ突き刺さる様な視線を感じるからとも言えるけど。

「（なんなんだよ、ったく）」

まるで俺の方が異質な存在と言われている感じだ。
刀持って雨の降る夜に駆けてきた女のが、俺からすれば“異質”な
んだけど。

そのまま歩いていると、また前方からバシャバシャと激しく水を叩く音が聞こえてきた。

それも一人どころじゃない。

十数人が駆けて来ているぐらいの音だ。

「（なんだ……？）」

だんだんと近付いてくる足音。

目の前の外灯がチカチカと点滅し、その下に足音の主がいた。

「う、嘘だろ……？」

切れかけ点滅する外灯の下、いたのは“人間”なんかじゃなかった。
なんだよ、こいつ……。

コンクリートを叩く雨の音など、俺の耳には既に届いていなかった。
誰しもがこんなものを見たら、呆然となってしまうだろう。

その姿、巨大なムカデ。

ただただ、巨大なムカデ。

突然変異？

そんな次元の話じゃない。

道幅ギリギリまである体躯。

三メートルはあるだろう。

外灯に照らされた、鈍く光るクワガタのようなその二本の牙。

黒光りする無数の足。

現実とか夢とか、そんなものの全部が吹っ飛んで真っ白になる俺の頭。
何も、考えられなかった。
ほんの数秒のゆったりとした時間の流れの後、俺の真っ白な頭を染
め始めたのは“恐怖”だった。

——逃げなきゃ——！！

——動け！動け！！動けエ！！

体が言うことを利かない。

震える訳でもなく、棒立ちの俺の体。

押し潰されそうなプレッシャーに、立っているのが精一杯なんだと
理解した。

ムカデと交わった視線を外すことができない。

金縛りにあったことはないが、こんな感じなのだろう。

全方向から押されてる感じ。

満員電車さながらの圧迫感。

その圧迫感全てに、殺気があるのだ。

そんな無力感に打ち拉がれていると、左から澄みきったあの声が耳に届いた。

「ボーツとしてないで逃げなさい!!」

雨の音すら遮っている恐怖の中、確かに届いた声。

俺の耳に、周りの音が戻ってきた。

あの鬱陶しい雨と彼女の駆ける足音。

外灯のバチツという点滅音。

それと、巨大なムカデの息遣いが。

「あ……ああっ!!」

束の間の生きた心地に、彼女に対して勢い良く返事をしていた。すぐさま踵を返し、来た道を戻る俺。

駆けていく最中、俺は彼女が気になり、立ち止まって振り返る。

「なにしてるの!? 早く逃げなさい!!」

彼女は、戦っていた。

その細い腕で刀を握りしめ、戦っていた。

雨で滑るコンクリートをしっかりと踏みしめ、戦っていた。

情けなかった。男として。

華奢な身体で俺を逃がす彼女。

正義感なんて振りかざす程、俺は強くない。

だから、立ち止まっていた足に力を込めて、また駆けた。

「はぁ……ッはぁ……ッ」

走っている所為で体温が上がり、俺の息が白くなる。

鼓動は忙しく脈打ち、脇腹にチクチクとした痛みが奔る。その時だった。

目の前の道、その先からさっきのように十数人が駆けてくる様な足音。

「嘘だろ……」

こんなんありか？

彼女がムカデと対峙している所からおよそ200メートル。そこまで来た俺に、同じようにムカデが立ちふさがった。

「くそ……ッ!!」

俺にできるのはたった一つ。

“必死で逃げる”ことだけだ。

なぜだか、昔やったシャトルランを思い出していた。またしても方向転換。

再び足に力を込めて、駆けた。

彼女が無事であることを願いながら。

俺が彼女の場所まで戻るのに、そうはかからなかった。息を切らし、普段使わない筋肉を無理に使い。

そうしてまた、俺は始まりの場所に戻ってきた。

「……!? ちょっと何してるの!？」

彼女は無事だったが、未だにムカデとの戦いは続いていた。

そんな中に、俺が舞い戻ってきたのだ。
素っ頓狂な声で、彼女は俺にそう言った。

「いや……あっち……からも……きてるんだ……!!」

息を整えながら、俺は抜粋しきつた言葉を必死で伝えた。

……が、そんなことがちゃんと伝わる訳がなく。

「くるって何!? 私なら大丈夫だから早く逃げなさい!!」

どうやら彼女は、“俺が彼女のことが心配で戻ってきた”と思っているようだ。

そんなカツコいい理由ならいいんだけど。

これから状況は明らかに悪くなる。

既にバシャバシャと水を叩く音が、すぐそこまできていたからだ。

その音に彼女も気付いたのだろう。ムカデの牙を刀で弾き、二、三步後ろに下がる。

「もう一匹? 最悪ね」

振り向き、その目に映ったもう一匹のムカデ。

彼女の心の底から出た言葉だと、俺にも分かった。

しかしながら、本当に状況は最悪だ。

戦えるのは彼女一人に対し、相手二匹。

更には俺という足手まとい付きだ。

ならば、どうする?

そんなことを考えていたら、不意に彼女は俺に声をかけてきた。

「ねえ、キミ。少しの間、そっちの相手してくれない?」

「は……っ？ 俺が？」

何を言ってるのか、理解に苦しんだ。

聞き返した俺に、彼女は言葉じゃなく行動で示した。

握っていた刀をそのまま、俺に投げつけてきたのだ。

もちろん刀身丸出しで。

「うわ……っ！ ちょっと！」

慌てふためきながら、細心の注意を払って俺は刀を受け止めた。

「危ねえだろ！！」

「それで戦って。私がこつちを片付けるまででいいから」

この女、何を言ってるんだ。

全くもって意味が分からない。

そもそもだ、俺が刀で戦うとして、彼女は どうする。

まさか素手とは言わないだろうが、見たところ他に武器を持ってる様子もない。

「おい、アンタはどうするんだよ？ 武器あんのか？」

「私のことなら心配しないでいいから、敵に集中して」

「なんだよ、こつちは——」

俺が言いかけた瞬間、痺れを切らしたムカデ達が動き出した。

彼女はそんなことはお構い無しといった風に、ゆっくりと右手のひらをムカデに向けた。

「炎法、火炎」

俺は、自分の目を疑った。

彼女がしてみせた行為、それはもう現実とは信じがたいものだったからだ。

簡単に言えば、手のひらから炎が出たんだ。

その炎は、まっすぐにムカデに向かっていき、黒光りする体躯を燃やした。

そんな驚きに浸りたかったのだが、こちらはこちらの相手をしなくてならない。

ムカデは、完全に俺を捕食しよう思ってるんだろうが。

刀を握る手に汗が滲む。

両手でしっかりと握った刀は、カタカタと小刻みに震えていた。

こんなに震えるなんてな。

俺は手に持つ刀の重さを、実感していた。訳の分からないまま刀を握らされた俺は、何故だか戦おうという気にまでさせられていた。勝てる訳がない。そんな当たり前のことも忘れて。

突如、ムカデの大きな牙が俺に向かって突き出される。

咄嗟に地面を転げ、スマートさのない避け方をした。

ここで一つ、分かったことがあった。

こいつの動きは、俺でもついていける。

彼女の様な軽やかなステップじゃなくても、避けられる。

「やってやろうじゃねえか」

俺のすべきこと。

それは、生き延びること。

幸いムカデの動きは緩慢だ。

避けて避けて避けて、隙ができたなら攻撃する。

俺にできる最大限をするんだ。

自分自身への決意表明。

それはすぐに崩された。

「が……っ!!」

緩慢だと思っていたムカデの動きが、一気に早まった。

俺の目では追いきれないほどに。

横風ぎに振るわれた牙は、俺の横っ腹に食い込み、そのまま吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされた俺の末路はただ一つ。

硬いコンクリートの壁にぶち当たること。

衝撃がくる直前、俺は身体を強ばらせた。

「ぐ……っ!!」

圧倒的な力で吹っ飛ばされ、その勢いで叩きつけられた。

無事に済む訳がない。

右半身に焼ける様な痛みが奔り、肩には痛烈な痺れが奔る。

どうやら、脱臼したらしい。

息苦しさ、口に広がる鉄の香り。

身体は鉛の如く重くて、動かすことが容易ではなかった。

この結果の全てが俺の過信。

戦えると思いがった故の結果だ。

「く……そっ！」

必死になっても、動かないものは動かない。

どこぞのヒーローみたいに、力が出る訳がない。

ムカデはそんな俺を見据え、牙の先をこちらに向けた。

ヤバイヤバイヤバイ！！

動けない俺は、ただの的。

ムカデが向けた牙の先、それが一気に加速し俺の胸目がけて迫ってくる。

終わったな、俺の命。

そう思つてグッと目を閉じ、覚悟を決めた。

——その時だった。

「ギリギリセーフね」

耳に届いたのは、澄んだ彼女の声と微かな金属音。

ゆっくり目を開くと、そこには片方の牙を失ったムカデと、いつの間にか俺が持っていた刀を持つ彼女の姿がそこにあった。

「水法、水流槍」

彼女はそう言いながら、刀を持たない左手で地面を触る。

するとそこから円錐形に渦を巻く水流が飛び出し、ムカデの顎に向かつていき当たった。

圧倒的体躯を持つムカデだが、甲殻の薄いと思われる顎への一点攻撃に、完全に押されている。

やがて水流は止み、その結果はムカデを貫くに至らなかった。だが、彼女の狙いは違った。

すぐさまムカデの顎に下に移動すると、刀を上に向け水流で攻撃した箇所突き立てた。

水流によって削られた甲殻。

彼女の持つ刀は容易に甲殻を貫き、ムカデの頭に侵入した。

水流はあくまで次の攻撃を確実に決める為に行ったことだと、俺はその時になって気付いた。

一瞬の判断。それを彼女はさらっとやってのける。

俺は守られる側なんだと理解した。

「大丈夫？ 立てる？」

「あ、ああ」

彼女がスツと右手を差し出す。

俺はその手を握り、まだ痛みの感じる身体をどうにか持ち上げた。左手で右肩を触ると、やはり脱臼していた。

「もう少し早く終わらせることが出来ればよかったんだけど……」

彼女は俺が負傷したことに負い目を感じているのだろう。

「いや、これは俺の自業自得でなったケガだから」

彼女が負い目を感じることなど何一つない。

そう断言できるから、俺は彼女に言った。

「うっん。そのケガは私の力不足だったから負ったんだよ」

どこまでも真っ直ぐで、素直な言葉だった。

俺がバカみたいに突っ走らなきゃ、彼女に負い目を感じさせずに済んだのだろうか？

「アンタは俺の命を助けてくれた。
力不足なんかじゃない」

この言葉は本心から思ふことだ。
結果的に、俺の命は救われた。
打撲だろうが脱臼だろうが、そこに命が危険に晒される要素はないのだから。

今日見たことが夢だと思いたいが、身体の痛みがそれを許さない。

「一体どうなってるんだ……」

火を出したり、水を出したり。
巨大なムカデが二匹出てきたり。
ファンタジーの世界だ。

「キミ、今日見たことは他言無用ね？
一般人に知られてはいけないことだから」

「言ったところで信じる奴なんていねえよ。
誰が、巨大なムカデを相手に女性が火と水を出して戦った、なんて信じるかよ」

「それもそうね」

彼女は俺の言ったことに共感したのか、ウンウンと頷きながらそう言った。
直後だった。

倒されたと思っていたムカデの片割れが、その身に炎を纏ったまま突っ込んできたのだ。

彼女の後ろ、すなわち死角からの体当たり。

彼女が気付くより早く気付いた俺は、彼女の持つ刀を咄嗟に取ると無謀にも向かっていった。

「——！！ ダメ——！！」

彼女は刀を奪われてようやくムカデの存在に気付き、俺に制止の言葉を放った。

そんな言葉を、今更受け入れることは出来ず。

加速した身体は、打撲の痛みを抱えながらも止まることの出来ないスピードまで達していた。

やらなきゃ——やられる——！！

なぜ向かっていくなんて無謀をしたのか、分からない。

身体が勝手に動いたんだ。

守ってくれた彼女への恩返ししたいって、心の片隅で思っていたのか。

だから、打撲の痛みも無視して身体が動いたんだと思う。

そうこうしている内に、俺とムカデの距離は完全に射程圏内。

右手は使えない。左手一本で刀は振り回せない。

なら、突きしかない。

俺は出せる最大限の力で刀を突き出す。

ムカデの向かってくるスピードと、俺のスピードと突くスピード。

全てのスピードが相まって、俺とムカデが衝突した。

「ガ……ッ!!」

俺の身体は宙を舞い、刀は弾かれた。

俺は体重差を考えに入れていなかったんだ。

トラックにでもぶつかったかの様な重い衝撃。

でも、なぜだか痛みがそこまでじゃなかった。

「嘘……ッ!?　なんで“この力”を一般人が!?!」

彼女は俺に向かってそう言った。

ムカデに押し負け、宙を舞う俺に対して。

一瞬の浮遊を終えた俺の身体は、そのまま地面へと叩きつけられた。

水溜まりに落ちたのか、バシャッと勢い良く水が跳ねた。

「クソ……ッ、——!?!」

悪態を吐き、立ち上がろうと膝を着いた時、ふと自分の髪が視界に入る。

俺の髪の長さはそこまで長くない。

けれど俺の視界に入ったのは、本当に自分の髪かと疑うくらいの長さ。

しかも、街灯に照らされた髪色は自前の黒ではなく白い色をしていた。

「なんだよこれ?」

引っ張ってみたりしたが、やっぱり俺の髪。

そんなバカなことをしていると、彼女の声が響いた。

「危ない！ 避けて!!」

「——!!」

俺が向き直り、視線移すとムカデはさらなる追い討ちをかけてきていた。

でも、ムカデの動きを見た俺の感想は違っていた。

「（なんだよ、止まってるじゃねえか）」

ムカデはその場にいるだけ。

動いてはいなかった。

スツと立ち上がると、俺は弾かれた刀を拾い、ムカデに向かっていく。右手は使えない。だけど動きの無いムカデなら、相手にできる。

さっきの過信とは違う、確かな確信。

——俺はこいつに勝てる。

無駄に振り回さず、突きを放つ。

両目を潰し、半開きの口に突き刺す。

鬱憤を晴らす様に、攻撃の通るところを俺は集中的に攻撃した。

「こんなもんか……」

俺は最後に脳天に無理矢理突き刺すと、彼女の方を見た。だが、彼女の視線は先程の位置から動いていなかった。

「（なんであっち見てるんだよ）」

完全に気が抜けた瞬間だった。
ムカデが地に吸い込まれる様に倒れる音と、彼女の声が聞こえたのは。

「早く逃げ……!？」

途中まで言うと、彼女はこちらを向いた。
不思議がるというより、驚愕の表情を浮かべて。

「なに言ってるんだ？ もう終わったぞ？」

「え……っ!？」

「ほら、この通り」

俺は後ろに倒れたムカデを指さす。
状況を確認した彼女の表情は、晴れることなくより一層の驚きに満ちた。

なんでそんなに驚いているのか、俺には分からない。
そんな彼女に声を掛けようとした時、俺の身体に異変が起きた。

「あ…… あああ”!!」

身体中に奔る激痛。
半端じゃないその痛みに、俺は地面に倒れ込み蹲る。

「ちょっと!? 大丈夫!？」

俺の耳に届く彼女の声。

近寄ってくる足音と、地面を叩く雨の音。
それらが全て遠ざかっていき、俺の意識はそこで途切れた。

まどろみの朝

ぼんやりとしたまどろみ。

視界が徐々に鮮明になっていく。

——ここは……？

視界に入ったのは、木目の綺麗な天井。

自分は寝ていたのだろう。体は重く、起き上がる気にならない。

首を動かし、辺りを見渡そうとすると真っ先に彼女の姿が目に入った。

俺が起きたことに気付いたのだろう。

読んでいた分厚い本をパタンと閉じると、声をかけてきた。

「気分はどう？」

「あー……、最悪だな」

俺が渴ききつたがらから声で言うと、彼女は「どうして？」と言わんばかりの表情で見つめてきた。

「やっぱり現実なんだなあ……って思ってた」

彼女が問いかける前に、俺は素直な感想を言った。

体中の痛み、彼女の存在。

その全てが、あの雨の夜の出来事を現実だと認識させるのに充分だった。

「俺……どうなったんだ……？」

未だにボーッとする頭で、そう尋ねる。

彼女はその問いに、的確に答えを出してきた。

「三日前の夜に、貴方の中の“力”が覚醒したの。恐らくは、私の刀が引き金でしょうけど」

「力？ 覚醒？ てか三日も寝てたのか！？ 俺！？」

今の俺にとって、力だの覚醒だの訳わからないことよりも、三日も意識がなかったことに正直驚いていた。彼女もまさかそっちに食いつくとは思っていなかったのか、面を食らっている様だった。

「そうよ、三日も寝てたの。それより、キミの今の状況、分かってる？」

「状況ってなんだよ？ 今の状況って言ったら……そうだな、女性の部屋に三日も居座ってる……って状況かな」

冗談混じりに言っただが、惨敗。

冷やかな視線を浴びる結果となった。

彼女は一つ、大きなため息をつく。

“幸せが逃げるぞ？” そう言いたかったが、言える雰囲気じゃなかったので止めた。

俺も空気が読めないほど、バカじゃない。

「とりあえず、色々説明する前に、名前教えてくれる？」

「名前？ ああ……、俺は坂上って言っんだ。坂上京祐、よろしくな。えーっと……」

「私は、想律 奏 ソウリツ カナデよ。
よろしくね、京祐」

呼び捨て……。

多分だが馴れ馴れしいとかじゃなく、基本的に想律は名前で呼ぶの
だろう。

「じゃあ、想律、説明してくれないか？」

「“奏”でいいよ。

私、名字で呼ばれるの慣れてないから」

自分が名字ではあまり呼ばれないから、自分も相手を名字で呼ばな
い訳か。

勝手な解釈をするが、本当かどうかは分からない。

「奏、説明してくれ」

ここは彼女の流儀に乗っ取り、俺は言い直した。
それに満足したのか、奏の表情から笑顔が溢れ、ウンと頷いた。

「まず、京祐の中の力を覚醒させてしまったのは、私の所為」

「どういうことだ？」

「“覇気”を込めて作った私の刀を握ったから、京祐の中の力を覚
醒させるに至ったの」

覇気。一体なんのことだが分からないが、とりあえず刀を握った為
に俺の中の力とか言うのが覚醒したってことだろう。

「一般人に刀を持たせても、通常なら力の覚醒には至らない……。あっても私の覇気で身体能力が若干上がる程度なんだけど……」

「俺は異例って訳か」

だいぶ話がややこしくなってきた。

覇気と力と覚醒。少なくとも三つほど分らないことがあるのは、確かだ。

「奏、まずは“覇気”とやらについて教えてくれ。じゃないと、話についていけない」

「そうね。“覇気”とは人間の持つ第三の力よ。身体力、精神力と並ぶね。

その覇気を使つて、私は火や水を出せるって訳。

もちろん、ただ出そうとして出るものじゃないけど」

覇気について説明されたが、俺の理解の範疇を軽く越えている。なおも奏は説明を続ける。

「この覇気という力は、京祐の居た世界にはない言葉だし、あるということも知られてない。

けれど、人間全てにおいて覇気は少なくとも持つてる力なの」

「つまり、俺にもあつて使えば火が出せると？」

「そういうことになるね」

なんだか凄いことになってる気がした。
俺も奏同様に火を出せる。

にわかには信じられないが、本当のことなんだろうと、奏の表情を見て思った。

俺が火を出せる……。それこそファンタジーだな。
そんな事を、俺は無意識に手のひらをグーパーしながら思っていた。

「次に“力”と“覚醒”だね。
これが今の京祐の状況をややこしくさせてる原因よ」

「俺に一般人ではあり得ない力が覚醒したから……とか？」

「簡単に言つと、そういうこと」

当てる気などさらさらなかったのだが、当たってしまった。

こんな俺に一体なんの力が覚醒したと言っただろう。

そんな実感はこれっぽっちもない。

「さっき覇気について説明したと思うけど、覇気には自身の身体能力を上げる力もあるの。

だから私はあの時、京祐に刀を渡した。

けれど、私の覇気が京祐の中にある覇気に呼応して、力を覚醒させてしまったみたいなの」

「その“力”ってのは？」

俺の問いかけに、奏はしばらく唸ってしまった。
一分経ち、二分経ち……。

「あー……ゴメン。分からないや」

アハハーと笑いでごまかす奏。

不覚にもそんな可愛らしい笑顔に見惚れている俺がいた。

「というより、京祐のが分かるんじゃない？」

よく思い出して？」

「思い出して……って言われてもなあ」

完全に迷宮入りしている俺に、奏は説明の続きを始める。

「力っていうのは、固有の能力なの。

その能力を使えるようになることを覚醒って言っの。

私の刀から京祐の身体に流れた覇気が、結果的には京祐の覇気を強めることになり、能力の覚醒に至ったんだと思う」

「そういえば……。

奏が危ないって言った後、ムカデはただそこに居ただけだった。目の前には居たけど、動いてなかったな」

俺の絞りだした記憶。

それを聞いた奏の表情は一気に驚きへと変わった。

「その時って……、私はどうだった？」

「奏は……、そうだ！俺がムカデを倒した後も、違う場所を見た！」

その言葉を聞いた奏は、右手を口元に持っていき、「やっぱり……」と小声で呟いた。

何かに確信を持ったのだろう。

スッと顔を上げ、ジッと俺の目を見る奏。

「京祐の能力、危険かもしれない」

「危険……？」

奏は分かっているっぽいけど、俺はさっぱり。

だが、奏の表情から察することは少しだけできる。
相当な危険ということだろう。

「京祐、いい？ 私の考えじゃ、その力は時空間を操る力よ。
絶大な力を、京祐は手に入れたの。
けれど、その反面リスクも大きい」

真剣な眼差しで説明をする奏。

それはどこか鬼気迫るものがあつた。

そんな気迫に押されながらも、俺は必死でその言葉に耳を傾けた。

「ムカデや私が止まっていたんじゃない。

止まっていたのは、時間。

その空間を動けるのは、京祐だけ。

それが京祐の能力よ……多分」

「そこまで言っておいて多分かよ……」

ここまで聞いておいてなんだが、俺はそれを言わざるを得なかった。
確信しましたという表情をしながら話をしていたのだ。
そりゃ言うしかないだろう。

「しょうがないじゃない！ 私の予想でしかないんだから！」

頬を膨らませながら言う奏もまた、可愛かった。

それはそれとして、さっき奏は“状況”をややこしくしていると

言った。

それは、俺が力を持ったからだろうか？

知ってる人がいるのに、悩むのはバカらしい。

と、いうことで早速俺は奏に尋ねる。

「で、なんで状況がややこしいんだ？

俺が力を持った。それだけじゃないように聞こえたけど？」

「ん？ ああ、一番の問題はそこなの。

京祐は覇氣が使えて、能力者にもなってしまった。

それはつまり、京祐は“私側”の人間になったってこと。

簡単に言えば、今まで通りの生活は送れないわね」

「——！？ どういうことだよ！？ 今まで通りの生活が送れないって!？」

奏の発言は、俺の心を取り乱すのに充分すぎるくらいだった。
冷静になんて、なれなかった。

「京祐、一回落ち着いて。

これからちゃんと説明するから！」

取り乱した俺は、身体中の痛みなどお構い無しに起き上がろうとしたが、奏にそう言われながら無理矢理ベッドに寝かせられた。
身体中の痛みはすぐに俺の頭に昇った血を元に戻してくれた。
冷静、とまではいかないが、それなりに話は聞ける程度まで。

「いい？ 京祐は覇氣だけでなく能力まで覚醒したの。

これは、京祐の居た世界では危険すぎるのよ。

覇氣だけなら使い方を知らないからいいのだけれど、能力の扱い方

は、覚醒した者の頭に自然と浮かんでしまつ。
京祐がどのような形であれ、その力を使うことは元いた世界では許
されないことなの」

「だからつて……」

俺はそれ以上なにも言えなかった。

疲れもあるが、頭にまるで走馬灯の様に奔る記憶のせいで。
俺に両親はいないし、兄弟もいない。

けど、友達はある。

バカばつかな奴らだけど、大好きな友達が。

皆の笑顔が、一人一人鮮明に脳裏に浮かんで消えていった。
奏の話を理解して、受け入れたからこそ……。

「分かった、俺は一体どうすればいいんだ……？」

「私と一緒に、学園に通ってもらふことになる。」

手続きには二日かかるから、それまで休んでね」

「……りょーかい」

俺の心に重複する混乱。

この二日で、それを払拭できるのだろうか。

奏は、こんな俺を見てどう思ふのだろう？

それを考える余裕は、今の俺にはなかった。

和やかな昼 天使の羽ばたき

奏との話し合いから一日経ち、身体にまだ痛みはあるものの歩けるまでに回復した。

俺の入学手続きが完了するのが、明日。

「あと一日か……」

覇気の力のせいか、俺の自然治癒力が上がってるのだろう。

痛みがあるのに、今までの俺の身体能力を上回ってるのが分かる。動いたからということもあるが、肌で感じる。

曖昧な表現だが、確かに感じるんだ。

そんなことを思い柔軟をしていると、ドアの開く音が聞こえた。

「ただいまあ」

この家の間取りは1DK。

玄関の前にキッチンと風呂があり、その先にダイニング。

玄関から見てダイニングの左手に寝室がある。

俺はその寝室で柔軟をしていた。

奏は真っ先に寝室へと足を運び、柔軟をしている俺を見つけると、手に持った荷物をドサツと床に落としてから言う。

「“安静”って意味、分かるよね？」

それはそれは怖い顔で。

実は今日の朝、奏は出かける前に俺に言ったのだ。

「痛みが引くまでは絶対安静だからね？」と。

そう言ったのに、帰ってきたら俺が柔軟体操をしているのだ。
怖い顔にもなるだろう。

「いや……ほら、身体をほぐさないと……さ？」

「ほぐして一体なにをするのかな？」

かなりの覇気を奏から感じる。

背後に鬼が見えるくらいに。

「わあーっ たよ、安静にするから怒るなよ」

きつと奏は俺の痛みが早く引くように、これほど強く言うのだろう。
横になってる間、色々と考えた。

別れのこともだし、奏のことも。

奏がここまで俺に親切にするのは、奏自身“負い目”を感じている
からだ。

その“負い目”を負わせてるのは、俺。

だから俺は、奏の背負う負い目を理解する義務と、それを少しずつ
軽くする義務があるんだ。

「もう……、痛みはどうなの？ だいぶ引いた？」

「ああ、柔軟体操できるからな」

「でも、しないでね？」

「……はい」

素直に返事をし、俺はベッドに横になった。

奏のベッドなのだが、これまた奏のご厚意によるものだ。意識が戻り、粗方の話がついた後に床でいいと言ったが、固い床だと痛むという理由で奏に押し切られた。

「京祐、明日は少し出掛けるから、よろしく」

「動くなつて言つといてか？」

皮肉たつぷりに言った俺だが、奏に「柔軟できるくらい元気でしょ」と言われ、俺は何も言い返せなかった。

「学園の下見と、京祐にはギルドへの登録をしてもらわなきゃいけないからね」

またしてもファンタジーらしい単語のお出ましだ。

学園には俺自身出向いて登録しなくていいのに、ギルドには出向いて行かなきゃいけないとは。

不思議な矛盾だが、この世界の常識なのだろう。

ちなみにだが、この場所は俺の居た世界じゃない。

奏によれば、気絶した後連れてきたらしい。

「りょーかい。それまでゆっくり身体を休めておくよ」

「うん、ぜひそうして」

奏は少しばかり頬を緩めてそう言った。

やっぱり奏は可愛いと改めなくても思ってた俺だった。

自然と緩みそうになる頬を必死で堪えている俺。

なんとも滑稽だっただろう。

そうこうしている内に、俺の臉は徐々に重みを増していった。まだ痛みと疲れの残る身体に、更に柔軟という負荷をかけたのだ。より疲れるのは当たり前だろう。

夢の中、俺は前の世界のことを見ていた。

くだらないことでケンカして、くだらないことではしゃいで、くだらないことで笑った時のことを。

くだらなかつたけど、光に満ち足りていた。

眠っている最中、俺の頬を涙が伝ったことは、起きてから気付くことになる。

「朝……か」

寝ぼけ眼で見る朝日は、元居た世界と変わらず俺を燦々と照らした。いつもは鬱陶しい光が、なぜだか懐かしくも思えた。

「ん……、京……祐？　起きたの……？」

ベッドのすぐ横の床から、俺以上の寝ぼけ具合で奏が目を擦りながらこつちを見ていた。

いつもキリッとしている奏の、もう一つの表情。

新しいその一面を見ることで、また一つ奏を知れた気がした。

「髪ボサボサだぞ？」

「京祐こそボサボサでしょ？」

二人して長い髪をボサボサにして、朝から笑った。
あの頃に戻ったみたいにな、くだらなかった。

「さて、用意して先に学園に行くよ？」

「りょーかい」

俺はアクビをしながらそう言うと、身体を持ち上げる。

痛みもほとんどが引いていて、スツと起き上がることができた。

と、ここで奏は昨日の夜に持っていた手荷物の中から、何やら黒い服の様なもの取り出した。

「これ、京祐のローブね」

「ローブ？　　ってなんだ？」

眠気も覚めきつてない俺に、投げ渡された“ローブ”とか言う服。
模様も何もあったもんじゃない。
ただただ、漆黒の服だ。

「今着てる服の上に着てね」

「あ、ああ……」

試行錯誤の後、ようやく着方が分かった俺は、頭を出し袖に腕を通した。

率直な感想は、魔法使いの気分だ。

フードやポケットもあり、実用的に作られているようだ。

「京祐、なんか様になってるね」

クスクスと笑みを浮かべながら、奏は俺を見ていた。
なんか気恥ずかしくて、視線を合わせられなかった。

「このローブは学園の指定服で、ギルドの登録に必要なものなの。
採寸はしたからピッタリくるでしょ？」

「確かにピッタリ……じゃなくて！ 採寸なんていつしたんだよ
！？」

「気絶してる間に」

あまりにサラッと言われた驚愕の事実。

空いた口が閉じないとはこの様を言うのだろう。そんな間抜けな表情をしていた俺に、奏は「そんなことばっか気にしないの！」と、なぜだか注意された。

有無を言わせない飄々とした態度に、俺は二つ返事で「……はい」と言ってしまった。

「よし、じゃあまずはギルドに行くからね」

「りょーかい」

朝からゴタゴタと騒がしかったが、俺はなんだか楽しかった。

胸にぽっかりと空いてしまった穴を、少しばかり埋めてくれた。

俺にとって奏の存在が、この世界で生きるという前向きな気持ちにさせてくれるんだ。

そう、気分を新たにした俺は奏と共に家を出た。

道中、奏にギルドについて色々聞いた。

これから行くのは、“天ノ冠”というギルドらしい。

天ノ冠はこの世界での警察的存在なのだと奏は言った。

この世界には三つの組織があり、それらがこの世界を回しているという。

その一つがギルド天ノ冠という訳らしい。

「その天ノ冠とか言うギルドに登録しなきゃいけないのか？」

「学生なら強制的にね。

勉強の一環として、学園はギルドから依頼を受けて生徒がその依頼をこなすって訳」

「なんかめんどくさい話だな」

「ギルドの依頼をこなすと、報酬が貰えるの。

生徒達が依頼をこなし、報酬を学園が学費として使うの。

だから、私達学生は学費を払わなくてもいいのよ？」

奏の言うことに、なるほどおと感心している俺がいた。

それと同時に、疑問のいくつかが消えたものもあるが。

「上手い具合になってるって訳か」

「そういうこと」

納得した俺を見て、満足気に奏はそう言った。

そうこう話をしている内に、目の前に大きな建物が見えてきた。ドーム状の建物。天ノ冠という文字の両脇に翼が彫られた看板。

全体的に白を基調とした配色。

周りは林が取り囲み、その一帯だけ別世界な感じがした。

「これがギルド天ノ冠の支部よ」

「この大きさを支部なのか……」

東京ドームの一回り小さくしたぐらいの大きさだが、それでもデカい。

迷ったりしたら大変だな。と、なんともお気楽な感じで思っていたが、そんなお気楽な考えをぶち壊す言葉が横から聞こえてきた。

「迷ったりしないだね？ 下手すると暴力的な人達に絡まれたりもあるから」

この時俺は、「（絶対迷ったりしないでおこう！）」と、真剣に心に誓った。

大きな入り口の扉を開き、中に入る。

外観同様、中も白を基調とし清潔感に溢れていた。

「にしても、広い上にだいぶガヤガヤしてるのな」

「まあね、学生だけが利用する訳じゃないしね」

「ふうん」

そんなやりとりをしながら、受付に向かう俺達。不意に奏が俺の手を取った。

「はぐれないようにね？」

至って普通の原因だけど、俺の心境はただならぬ恥ずかしさに見舞われていた。

人ごみの中を俺の手を引っ張り、ズンズンと進んでいく奏。さすが慣れてるといった感じだ。

「ここはいつもこんな感じなのか？」

「うん。お小遣い稼ぎや、強くなりたい人達の集まり、部活なんかで利用する生徒もいるよ」

「多種多様だな、まさに」

「そういうこと」

奏との会話が終わったところで、ちょうど受付に着いた。

受付の人は女性で、茶髪のショートカットが似合う素敵な方だった。服はというと、指定なのか白のローブを着ていた。

「天使登録をお願いします」

「かしこまりました。では、お名前とご年齢をお願いします」

奏に「ほら、京祐。名前と年齢言って！」と急かされ、受付の女性に自身の名前と年齢を言った。

「坂上 京祐様、ご年齢19歳でお間違いないですね？」

「あ、はい」

名前と年齢を確認した受付の女性は、向かって左にあったパソコンらしき物に向き合い、カタカタと何やら打ち込んでいく。そんな光景を見ると、奏が驚いた様子で口を開いた。

「京祐って私と同じ年だったんだ！　なんか偶然だね」

どこか嬉しそうなその表情。

俺もなぜだか、今まで以上の親近感が湧いてきた。

「天使登録完了致しました。

坂上京祐様、こちらのカードが登録証となります。

無くされますと、再度登録のし直しとなりますので、お気を付け下さい。

貴方に神のご加護があらんことを」

受付の女性は俺に真っ白なカードを渡すと、そう言うてから一礼した。

「さ、京祐。一旦出るからね。

色々質問あると思うけど、それは出てからね」

今まさに質問をしようかと思っていた俺。

奏に見透かされていたようだ。

奏はまた俺の手を取り、出口へと向かって歩きだした。

よくよく考えてみると、あんな人ごみの真っ只中で天使ってなにか、カードってなにか聞いたら、奏の立場はないな。

恥ずかしさ満点だ。

奏がいち早く察知してくれたことに感謝する俺だった。

来た時の様に、人ごみをものとしないう奏。

さすがと言わざるを得ない。

そんなことを思っている内に、出口はもう目の前まで来ていた。
ゴタゴタが起きなくて本当に良かった。

「外にベンチがあるから、そこ座ろ」

奏はなお手を繋いだままで、俺を引つ張りながらベンチを目指す。
入り口から一本伸びた道の両端に、いくつかのベンチがあり、適当なベンチに俺達は腰を落ち着けた。

至ってシンプルなベンチは、これまた真っ白。

芝生やら木々やらの中にあるそれは、風景に馴染んではいなかった。

「ふう、とりあえず無事に済んだね」

「そうだな」

質問とかそつちのけで、安堵の息を吐き出した。

正直な話、ギルド内を色々と見学したかったのは秘密だ。

「で、何から聞きたい？」

二人共に落ち着いたところで、奏から話を切り出した。

「うーん……、まずは天使？ とか言うやつについてかな」

俺の言葉に、奏は「分かった」と言うと、説明を始めた。

「天使って言うのは、ギルド内での強さのランクを表すの」

「ランク？」

ギルドに強くなりたい人達の集まりが利用する。
その言葉の意味が、ここにきてやっと分かった。

「天使には大きく分けて9階級、強さの序列があるの。
それが、熾天使、智天使、座天使、主天使、力天使、能天使、権天使、大天使、天使っていう順なの」

「熾天使が一番強いってことか？」

「そうそう」

天ノ冠というだけあって、ランクの表記も天使。
ふんふんと頷いていると、更に奏は説明を続ける。

「その階級を更に細かく分けるのが、天使名なんだけど今はABCで表されてて、天使名が付いているのはギルド最高ランクに位置する熾天使だけなの」

「つまり、天使Aランクって感じか？」

「そういうこと。熾天使だけは、ABCじゃなくてミカエル、ガブリエル、ラファエルになるの。」

三大天使と言われる三人は、天ノ冠で最高権力を持つてると言われているのよ」

なんだか今の俺からすれば、イマイチその熾天使の強さがピンとこ

ない。

当たり前って言えば当たり前だけど。

「ちなみに今の俺は天使の何ランクになるんだ？」

その言葉を待つてましたと言わんばかりに、奏が笑顔になった。
なんか、さっきから先読みばかりされてる気がして、なんとなく落ち込んだ。

「さっきカード貰ったでしょ？
そこに覇気を込めてみて？」

覇気を込める。

二日前に言われていたら出来なかったであろうが、この二日で自分なりに覇気とやらを肌で感じることを覚えた。

最初は無意識に感じていたみたいだったが、時間が経つに連れ、それが覇気だということに気付いた。

俺は奏に言われた通りにカードをポケットから取り出すと、クツと指先に意識を集中する。

「文字が……浮かび上がった」

今まで真っ白で何も書いてなかったカードに、俺の名前と年齢、そして天使Eという表記が浮かび上がった。

「これが京祐の今のランクだよ」

「なるほど、で？ ランクを上げるにはどうするんだ？」

天使Eというランクを見た時、俺は悔しくすぐにそんなことを奏に

聞いてしまった。

「そんなこと今聞いてどうするの？」

「ランクを上げる。ただそれだけだ」

俺の中にある100%のカッコつけ方で言い放った。

そこに山があるから登る。ただそれだけだ。的に言ってみた俺。

どうも奏のストライクゾーンをことごとく逸れたようだ。

奏の口から言葉はなく、心の底からのため息を吐いていた。

「京祐、いい？ 能力が使えても、覇氣を使えなきゃ一生Eなのよ？」

今の京祐に必要なのは、覇氣の使い方とコントロール！

ランクを上げることは、その次に考えて！」

最近、奏の性格が少しだけ分かってきた。

“曲がったことは大嫌い”ということだ。

「冗談だって、俺もそんなくらい分かるよ」

「京祐のは半分本気の半分冗談のくせに」

どうやら俺の性格も少しだけバレてしまっているようだ。

凶星を食らった俺は、ひたすら笑う行為に徹したのは言うまでもない。

「そろそろ学園の下見に行こっか！
日が暮れると面倒だしね」

「そつだな、俺も学園は興味があるからな」

俺達はベンチから腰を持ち上げると、軽くお尻をはたいてから歩きだした。

夕暮れの学園

歩いていく最中、俺はどんな学園かを想像していた。

ギルド支部であの大きさだ、学園も相当大きいと考えられる。

生徒数が分からない為、安易な大きさとは思えないが。

ところで、奏の家からギルドまで約30分。

ギルドから学園までは一体何分かかるのか。

周りには赤いレンガの家が立ち並び、時折お店らしきものもある。先程の森に囲まれたギルドからガラリとその表情を変えていた。

「なあ、この街の地図とかないのか？」

俺はなんでもかんでも聞くのは迷惑だと思い、そう聞いた。

「地図？ どこか行きたい場所でもあるの？」

「いや、ギルドから学園つてどれくらい距離あんのかなあって」

「この街はね、森の中を円形に切り開いて作った街なの。」

ギルドと学園は対極にあつて、どちらも森に囲まれてるんだよ。私の家がちょうど街の真ん中にあるから、一時間くらいかな？」

「そうか、りょーかい」

中々ヘビーな距離だな。

そう心に思ってしまった。

それと同時に、また奏に説明させてしまったと、後悔もしていた。分からないのはしょうがない。

でも、そこで全てを奏に頼っていては、いつまでも俺は成長しない。地図があるかを聞いている時点で、頼っているのかもしれないが。

「ほら、学園が見えてきたよ！」

奏が指差す方向に、赤レンガ造りの建物が見えてきた。その大きさは遠目で見る限り、結構な大きさだ。

「だいぶデケえな……」

「そりゃあねえ、全生徒数が1000人弱くらいいるからね。三棟に分かれて建物があつて、コの字に建ってるんだよ」

「にしてもデカすぎないか？」

例え1000人いようが、三棟もあるなら四階建てくらいで済むだろう。

なのにこの学園ときたら、見た感じ六階は確実にある。

「そう？ あれが普通の学園の大きさだよ？」

主要都市にはこれよりもっと大きな学園もあるくらいだし」

「そうなのか……」

この世界の常識と、俺の居た世界の常識。その確たる違いを、より深く知った俺だった。

建物に向かってひたすら歩く。

歩いていけばいく程、その大きさは明確なものになっていった。

「うわぁ……圧巻だな」

足を止めて、少し遠目でそう呟くと、奏は「見てばかりいないで行くよ?」と俺の腕を引っ張った。

少しよろめきながらも体勢を立て直して、奏の横を歩いていった。

「ここが学園の正門だよ。」

正門には学園関係者しか入れないようになってるんだよ!」

驚けと言わんばかりに、堂々とそう強く言った奏。

更には、その右手は力強く握りしめている。

そんな奏の心とは裏腹に、俺はただ「へえ……」と軽く頷いてしまった。

「べ……別に驚かせようとかじゃないからね!」

「あー、分かった分かった。」

分かったから落ち着け?」

奏の頬は恥ずかしさから真っ赤に染まり、俺の顔を見ようとはしない。

俺の言葉も聞こえてはいないようだった。

ずっとブツブツと小声で何かを呟いている奏。

よく聞くと、何やら弁明をしているようだ。

「いいから行くぞ?」

今度は俺が奏の手を取り、歩き出す。グイッと引っ張ると、若干の足のもつれはあったものの、そのまま歩き出した。

バランスをとることの出来た奏の意識が次に向かった先は、奏の手

を引っ張って先頭に行く俺の姿だった。

「京祐！ ダメ！」

「ん？ なにがだ？」

奏の制止を疑問に思い、そう尋ねながら俺の指先が正門に触れた。
——その瞬間だった。

「——！！？」

バチツという感電音と、指先に奔る痛み。
とっさに正門から手を離し、未だにビリビリと痺れながら痛む右手を見つめた。

「大丈夫！？ ケガは！？」

「いや、ちょっと痺れただけだ。

大丈夫だよ」

「そっかぁ……よかったぁ」

奏は心の底からの安堵のため息を吐き出した。

奏の慌てっぷりを見る限り、相当危険な行為だったのだろう。

実際、直前で奏がダメと言っていなかったら、正門を無意識に握りしめていただろう。

「この正門は学園関係者以外の覇気を感知して、高圧電流で撃退する。」

通称「雷門・イカズチモン」と呼ばれる学園への侵入者対策の一

つなの」

「だいぶ物騒なもんが学園にあるんだな……」

「物騒…… かあ、でもこれくらいいしないといけないんだよ……。」

奏の表情は複雑だった。

どこか悲しげで、どこか憤りを吐き出すような、それらの感情を一言一言に乗せていて。

俺にはなんて返事したらいいか、分からなかった。

「あ……っ、ゴメンゴメン。
中に入る？」

ニコツと笑う奏。

暮れてきた太陽の光に照らされたそれは、無理して笑っている奏を俺の瞳に映し出していた。

三棟に分かれた校舎一つ一つに昇降口があり、その中の中央に位置する校舎に俺達は入っていった。

しばらく廊下、階段と歩き、校舎の最上階まで歩いてきた。

最上階の中央、そこに両開きのなんとも気品漂う木目の美しい扉があった。

奏は二回、コンコンツとノックすると中からの返事を待つ。

「入りなさい」

「失礼します」

向かって右手の扉を引き、奏と俺は部屋へと入っていく。
入ってすぐ、俺の目に飛び込んだのは真っ赤な絨毯と重厚な机、
その上に並ぶ書物の数々。
壁には剣やら槍やらがかけてある。

「学園長、連れてきました。

この方が、先日入学手続きをお願いした坂上京祐です」

そう奏が説明すると、学園長は「おお、キミか」と言って、立ち上がった。

俺は学園長の容姿にだいぶビックリしていた。
結構な高齢のイメージをしていたが、実際見てみると四十歳前後の
様に思える。

綺麗な金の短髪に、両目の色も金。

身長は俺よりも一回りぐらい大きい。

赤いローブを纏い、服の所々に装飾がなされていた。

「聖蘭学園にようこそ。

坂上京祐君」

「あつ、どうも」

その声色も若々しい学園長。

だが、その表情は常に柔らかく、優しい印象を受けた。

「私が学園長の天笠アマガサだ、よろしくね」

「こちらこそ、坂上です。よろしくお願いします」

軽く挨拶を済ますと、学園長は「案内しよう、ついてきてくれ」と部屋を先に出る。

俺と奏は後を追って部屋を出た。

「まずこの学園は、三つの棟がある。それは分かるね？」

廊下を歩き、窓から外の景色を眺めながら、学園長は俺に質問をしてくる。

俺は「はい」と返事をする、学園長は更に続ける。

「三つの棟、それはこの学園においての年齢層によって分かれている。

だが、年齢以上に術、知識があるならば上の学年にいくことも可能にしているんだ。

その子の力を更に伸ばしてあげれるようにね」

こちらに向いて、笑う学園長の空気は和やかで優しく。陽が傾き始め、窓から射す光がそれを強調させていた。

「なるほど。ところで学園長、術というのは……？」

飛び級制度は理解した。

が、術というのが分からない。

恐らくは、火を出したりすることだろうが、ちゃんとした形で教えてもらいたかった。

「術かい？ 想律君から教わってないのか……」。

術というのは、覇気を変換させ物質を発生させることの総称だよ」

途中、小声になり何かを考えていたが、学園長はきつちりとした説明を俺にくれた。

「総称というと、何種類があるんですか？」

「そうだね。法術と呼ばれるものと、纏術と呼ばれるものの二つあるんだ。

法術は物質を孤立させ放つのに対し、纏術は物質を身体と一体化させるんだよ」

学園長の的確な説明に、「なるほどお」と意識せずとも俺は頷き、奏も何故か頷いてしまっていた。
ものすごく奏に言いたかったが、学園長の手前言えずそのままスルーした。

「さて、そろそろ着くよ」

「着くつてどこにですか？」

俺は素っ頓狂な声を出してしまった。

学園長は振り向き、「ん？」と言った後、「ほら、ここが第一闘技場だよ」と言い目線の先を指差した。

「闘技場……？」

学園長の意図が分からない。

奏は下見と言っていたから、自然な流れなのだけどもなんか引つ掛かる俺がいた。

下見のはずなのに、今のところ学園長室と闘技場。
違和感を覚えるのも仕方ないというものだ。

「さあ、坂上君。テストを始めようか」

「……………は？」

俺の聞き間違いだろうか。

今、“テスト”という単語が聞こえたんだが。

チラッと奏を見てみると、含み笑いを浮かべてこちらを見ている。

「ん？ どうしたんだい？ テストあるって、聞いていただろう？」

「いや、まあ、はい」

奏の意図が分からない以上、下手に否定も出来ず。

訳も分からないまま、広々とした闘技場の中心へと歩いていく。

「さて、テストの内容だけど、私と試合をしてもらおうよ。いいね？」

「試合……ですか？」

学園長との試合。

100%試合にならないと思う。

確信をもってそう宣言できる。

「そう、試合。ま、今のキミの力量を見たいんだよ」

そう言って学園長は羽織っていたローブを脱ぎ、足元に落とした。

ノースリーブのピッチとした黒の服。

両腕は筋肉独特の盛り上がりを見せ、身体全体に無駄な肉はなかった。

「さあ、始めようか。坂上君は法術でも纏術でも、自身の持てる力の全てを出してくれ」

「……はい（力の全てって……なんも出来ねえんだが……）」

困り果てた俺に対し、奏が少し離れた場所から声をかける。

「京祐え！ 学園長は強いからねえー！！」

言われずとも分かってるわー！！

そうツツコミたい衝動よりも、テストの方に集中する俺がいた。対峙して数秒、学園長の放つ覇気が“変わった”。

今までは肌で感じてた学園長の覇気が、今は見てとれるのだ。学園長の腕、足。

それら身体に纏われていく何か。

それが“覇気”だとすぐに気付いた。

「覇気が……見える」

驚きを隠せない俺に、学園長はフツと笑いながら声をかけた。

「これが纏術の基礎、“身纏”。

覇気そのものを身体に纏わせ、身体能力を特化させるものだ」

みるみる内に学園長の全身が覇気へと包まれた。

ビリビリとした空気が、その量と濃度を表していた。

「さて、一撃目はキミに譲ろう。

……来なさい」

真っ直ぐに、その視線を俺へとぶつける学園長の表情は真剣そのものだった。

何が合格か、何が不合格かはわからない。

ただ、真剣に対峙する学園長と真っ向からぶつかりあうことを俺は決めた。

一気に駆け出し、右の拳を学園長へと振るう。

ケンカなどしたことの無い俺にとって、人生初の全身全霊を傾けた一撃。

「……そんなものかい？」

振り抜いた拳は空を切り、学園長は余裕を持ってそう聞いてきた。

「ク……ッ」

「次は私の番だ」

言うが早いのか、すでに学園長は右手を振りかぶりそのまま一気に俺の腹部に平手を叩きつけた。

「ガァ……ッ!」

腹部から背中に衝撃が貫け、そのまま後方へと飛ばされた。圧倒的なまでの“力”。

嘔吐感と痛みが身体に奔る。

「ゼ……ッハァ……クソ……」

「もう終わりかい？」

膝をつき、顔を歪める俺に、学園長は冷静に問う。

勝てる勝てないかじゃなく、学園長に一発を入れたい。

出来る限りのことをする。

その“出来る限り”とは何か。

痛みでふらつく身体をどうにか持ち上げると、ただ真っ直ぐに学園長を見据えた。

「やる気はあるようだね」

そう言つて笑みを浮かべる学園長の表情は、今の俺には見えていなかった。

己の中にある“覇気”に意識を集中させていたからだ。

「ハアアツツ！！」

「ほほう、いい覇気だ」

身体の中にあつたものが、身体の表面に出てきた感じがする。

集中をそのままに、足に力を込めて一気に加速した。

「中々速い…が、まだまだ私にとっては遅いな」

今まで以上に速く、今まで以上に重い右拳を振るつたはずだった。

それなのに、学園長は涼しい顔をして左手で軽々と受け止めていた。

「キミの身纏、中々良い量と質だが、私の身纏を上回ることはない。テストの結論も出たことだし、終わらせよう」

「――!?!」

学園長が言い放った瞬間、またも腹部に痛烈な一撃が入っていた。それも、一撃目とは比にならない力で。

俺がその一撃に気付いたのは、吹っ飛ばされた後だった。

「ゴホツゴホ……ッ!」

腹を押さえ、未だ引く様子をみせない痛みと闘っていると、学園長は目の前まで歩み寄ってきた。

「テストは終了。結果は……」

学園長の唐突な結果発表に、痛みそっちのけで結果に氣をとられた。だが、同時に結果は不合格だろうと、腹も括っていた。

「……合格だ。入学おめでとう坂上君」

「は……!?!」

この人は何を言っているのだろうか。

今の試合の中のどこに合格の要素があったのか。むしろ不合格要素たつぷりだったと自負できる。

「明日にはキミの教材を送っておく。

明後日から学園での授業になるからそのつもりだね」

「あ、はあ……」

「良かったね、京祐」

いつからいたのか、隣には奏がきていてそう労ってくれた。

「では、私は仕事が残っているからこれで。」

坂上君、想律君、良い休日を」

その言葉を残して、学園長は闘技場を後にした。

なんだか訳の分からない内に始まったテストは、訳の分からないまま終わってしまった。

「さ、帰ろう京祐」

「ああ、そうだな」

頭のパニックは否めないが、それよりも疲れのが上回った。

奏に手をかしてもらい立ち上がると、俺達もまた闘技場を後にした。

明後日から始まる学園。

この世界で、生きる第一歩になるだろう。

どんなものなのか、それを考えるよりも、今は帰って休むことを優先した。

木漏れ日の勉強会

奏の家へと着くと、リビングにあるソファーにダイブした。

「……疲れたあ」

「お疲れ様、合格おめでと」

ひょこつと足元に座ると、そう言ってくれた。

実感のない合格は、人生初だ。

納得すらまだしていない。

「なあ、絶対不合格だと思っただけど？」

寝そべっていた身体を起こすと、奏の隣に座ってそう聞いてみた。
奏は迷う様子もなく、「それはね」と話しだした。

「学園長には京祐が何の術も使えないことを伝えておいたの。
多分、学園長は身纏を真似できたら、合格にしようとしたんだと思
う」

「もし、俺が能力を使ったら？」

そんなこと冗談で聞いたら、奏は「そんな時は私が怒る」と笑いながら言ってみせた。

「それに、例え能力を使っただとしても、京祐は学園長には勝てない
よ」

表情からして間違いないだろう。

俺自身、使う気などさらさらなかったが。

「ご飯にしようか!」

「そうだな、手伝うよ」

キッチンに向かおうとした奏の後についていこうと立ち上がる。

「疲れてるんじゃない? 休んでもいいよ?」

「いや、こっちに来てから奏に頼りっぱなしだからな。手伝いくらいさせてくれ」

俺の言葉に奏は「そう? じゃ、手伝ってもらおうかな」とエプ

ロンを持ってきた。

勿論、俺の分も。

「手伝いはいいが、これは……」

奏が持ってきたエプロンは、ピンク色のフリフリが付いたなんとも可愛いデザインのもの。

「着なきゃダメか……?」

「うん!」

俺の懇願は実らず、仕方なく着ることに。

「京祐、髪長いから似合うよ! 可愛い」

恥ずかしい。ただただ恥ずかしい。
まさか俺がこんな恰好になるなんてな。

「は、早く料理をつ、作ろう」

「ん？ そうだね」

俺の動揺が奏にバレないことを願いつつ、奏の指示を聞いて手伝いを始めた。

「それを輪切りにしてくれる？」

「あ、ああ……」

包丁をハイと渡され、その刃が目映る。

柄は使い古された感じがあるのだが、その刃の綺麗さたるや新品にも負けていない。

錆びはもちろん、刃こぼれもなく一般人が研いだとは思えない出来だった。

「これ、奏が研いだのか？」

「ん？ そうだよ。中々でしょ？」

自信満々の笑みを浮かべ言うだけの出来なのだろう。

俺もそう思うから「ああ、凄いよ」と包丁の刃を見ながら頷いた。

「私ね、女剣術家を目指してるんだ！
強く気高い人になる為に」

「ふうん。だからか、こんなに上手く研げるのは」

「まあね！　鍛冶屋に行っでは見学させてもらったりしてるんだよ」

奏の目、言葉から伝わるのは、明るい未来を想像している前向きな心。

俺が昔 置いてきた、その心を持っていた。

眩しいくらいの笑顔を見た俺の顔もまた、笑顔だった。

「その夢、叶うといいな」

「うん！」

そんな他愛ない会話を交わしながら、料理は着々と作られていった。全ての料理を作り終え、テーブルに並べられる。

ご飯にハンバーグ、サラダとシンプルながらも美味しそうな料理が出来上がった。

「いただきます！」

「いただきます」

奏の合図と共に、料理に手をつけはじめる俺。

そのどれもが美味かった。

一人暮らしたった俺にとって、他の人が作った料理を食べる機会がなかったからだ。

先日も奏が作ってくれた料理は食べたが、なにぶん療養中だった為にお粥だったのだ。

ちゃんとした？

料理はこれが初めてになる。

「……美味い」

「そりゃね、一人暮らしナメないでよね」

冗談混じりに言う奏に、俺は「ああ」と返事しか出来なかった。それほどこの料理が懐かしく温かったんだ。

「明日には教材が届くし、明日は少し術を教えてあげるね？」

「ぜひお願いするよ。早くこの世界に馴染みたいからな」

「任せて！」

お互い笑顔の絶えない夕食を過ごした。

食後、先に風呂をいただき、今日流した汗を流す。
テストの後に買った下着と服に着替えると、タオルで長い髪を丹念に拭きながら、奏に声をかける。

「先に風呂入って悪かったな。次どうぞ」

「あつ、うん」

奏は前にも読んでいた本をパタンと閉じる。

俺が風呂入っている間、読んでいたのだろう。

「それ、なに読んでんだ？」

「これ？　これは解術書って言って、術の知識や発動の手引きだよ」

「なるほどねえ。そんなのもあるんだ？」

「うん、学園で学べない術はこうやって解術書を読んで独学で学ぶか、人から教えてもらうのが一般的なんだよ」

そこまで言っていると、奏はタオルと着替えを持ち、バスルームへと向かった。

バスルームに入るドアの前で、「のぞかないでね!？」と釘を刺してから入っていった。

そんなこと言わずとも分かってるんだが。

手持ちぶさたな俺は、奏の読んでいた解術書という物を手に取る。だが、少し開いてすぐ閉じ、テーブルの上に置いた。

「さっぱり見方がわからん」

またしても手持ちぶさた。

なにをしようかと考えている内、なぜだか身纏を修行しようと考えついた俺。

意識を集中させ、身体に覇気を纏わせていく。

「（もつと……もつとだ……）」

少しずつ、だが確実に覇気を使いこなしている感じがする。

奏に言ったらまだまだだと笑われるだろうが。

意識を集中させていく最中、脳裏にぼんやりと何かが浮かび上がってきた。

それは、意識を持っていくことに鮮明になっていく。

映像でも、言葉でもなく、言葉では表現し難いふわふわとしたイメージの様なものが見える。

だけど、それを理解できる自分がいた。
多分、これが奏の言っていた能力の扱い方というやつなのだろう。

「ふう……。こんなもんか」

今のをきっかけに、俺は自身の能力というものの根源を理解していた。

対象の時間停止、空間移動、そしてそのリスク。

おおよそ奏の予想通りだった。

俺が倒れた原因もまた、そのリスクの所為。

止めた時間の中を動くということは、現実時間からすれば俺は尋常じゃない速度で動いたことになる。

その速度に俺の身体が耐えられないんだ。

「（難しいもんだな……）」

そんなことを思っていると、奏が風呂から上がってきた。

髪をアップにした彼女は、どこか清楚な感じを漂わせている。

俺が見惚れていると、それに気付いた奏が声をかける。

「京祐どうしたの？　ボーツとして」

「い、いや、別に……。ただ印象変わるなって」

俺の言葉が気になるのか、キョロキョロと自分を見始める奏。

自分の変化というのは、自分では気付きにくいものなのだろう。

「ねえ、印象ってどこが？」

「髪をアップにしてると」

素直に答えると、奏はイタズラな笑みを浮かべる。

「そつかあ、京祐はこういうのがタイプなんだあ」

奏の表情は弱みを握ったと確信している表情だ。

厄介なことになった。

「もう寝る。おやすみ」

完全な逃げだが、こうする他どうしたらいいか分からないので仕方ない。

俺が風呂に入っている間に用意してくれたであろう布団に入り、頭までかぶった。

「可愛いところあるんだね、京祐って」

「……うつさい。奏も寝ろ」

布団の中からくぐもった声で言うと、「おやすみい」と上機嫌そうな声と電気を消す音が返ってきた。

とりあえず、逃げ切った。

安堵の中、俺は眠りについた。

翌朝、俺は奏と共に近くの森の中へと向かっていた。

未だボーッとする頭を覚醒させつつ、奏の後ろを付いていく。

「どこまで行くんだ？」

「私の秘密の場所まで」

さつきからこれしか言わない奏。
どれくらいかかるのか、あるいはどの辺なのかすら教えてくれないのだ。

「ほら、着いたよ！」

そう指差す先に、森の中で少しばかり拓けた場所がそこにあった。
木々の合間から射す木漏れ日が、幻想的な雰囲気醸し出すそこそこ、奏の言う秘密の場所らしい。

「なんだか気持ちいい場所だな」

「でしょ？」

奏の嬉しそうな笑顔と、小鳥の囀り。
時折、肌を撫でる風邪が心を穏やかな気持ちにさせてくれる。

「休日の朝はいつもここで過ごすんだよ。」

「ここは落ち着くし、集中するのにも適してるから」

「確かに、寝れるぐらい気持ちいいよ」

「寝に来てないからね、京祐？」

「冗談だって」

笑いながら言う俺に対して、奏は「冗談に聞こえないよ」とクスリと笑う。

「じゃ、始めよっか」

「おう」

奏は手に持った刀を抜くと、凜とその雰囲気ガラリと変える。
俺もまた、奏の目を見据え意識を集中させていく。
その時だった。奏が不意に声をかけてきた。

「京祐、瞳の色が……」

「瞳の色が？ どうした？」

「銀色に変わった……」

「は？ 銀色？」

「うん……銀色」

奏が冗談でこんなことは言わない。というより奏は冗談自体言わない。

奏が言うには、黒い瞳が銀色に変わったという。

「まあ、髪の色も銀になったし気にしない気にしない」

「京祐が気にしないならそれでいいか！」

二人してお気楽な考えだが、瞳の色が変わったからといって何か不

都合がある訳じゃない。

瞳の色は気にせず、先ほどの続きを始める。

「刀には覇気を纏わせて切れないようになってるから、安心してね？」

「切られる気はねえよ」

「ふうん、じゃ、お手並み拝見ッ」

会話の最後、奏は全身に覇気を纏いトップスピードで俺の側面に移動する。

俺が奏の位置を把握すると同時に、奏は既に刀を振りかざしていた。

「チッ!!」

舌打ちをしつつ、俺は即座に前回り。

ギリギリのところで奏の攻撃を避けた。

「まだまだ行くよ!」

前回りしたことにより、俺は体勢を立て直すまで時間がかかり、その間に易々と奏は次の攻撃に移る。

俺の背後に回った奏は、容赦なく刀を振るう。

だが、奏の刀捌きは大振りで、俺が把握してから動けるくらい時間があった。

そのまま横に転がるように避けると、俺は一回試合を止めた。

「ちょっと待った。奏、わざわざ大振りで攻撃しなくていい」

「あつ、バレた？」

「あんだけ過度にやられたらな、バレない訳がないだろ……」

「私が本気でやったら京祐が一方的にやられちゃうでしょ？
それじゃ——「構わない」

俺は奏の言葉を最後まで聞かずにそう言った。

聞かずとも分かったからだ。

俺を成長させる為に手加減をしている。

本気になれば瞬殺できるのに。

俺からすれば、そんなものは“甘え”でしかない。

「本気でいい。じゃないと意味がない」

真剣に、奏は分かってくれと信じて言う。

俺の真意を理解してくれたかどうかは分からないが、奏は「分かった、本気で行くね」と言ってくれた。

ありがとうと一言　言ってから俺は最大限の集中をする。

「（いい覇気だね、京祐……、でも）……まだまだ勝てないよ!!」

ほんの一瞬。奏の身体が消えたと思うと、俺の首には刀が据えられていた。

「——!!」

「まず一勝……だね」

全くと言っていいほど見えなかった。

身体能力の活性化、身纏。

ここまで速くできるのかと、疑いたくなる。

「京祐、これが私の本気のスピード。

最大限の身纏と、法術、霸弾を組み合わせているの。

見えなかったでしょ？」

「ああ、全くな。霸弾？　　って言うのは？」

「法術の基礎になる術だよ。

霸気を固めて放つ術なんだけど、私の場合は足の裏全体から地面に放って、瞬発的に初速を上げてるの」

「それを俺に覚えろと？」

法術の基礎だと言うし、覚えなきゃ話にならないのだろう。

そんな感じのことを言われると思っていた俺にとって、思いもよらない返事が返ってきた。

「霸弾は当たり前、京祐には炎、水、風、土の転換属性も覚えてもらうよ」

また訳の分からない単語が出てきた。

転換属性。いかにもハードルが高そうな響きだ。

「あとはねえ……」

「まだあるのか！？」

ツツコまずにはいられなかった。

その転換属性すら出来るか分からない状況で、まだ他に覚えろと言うのだからツツコむのしょうがないだろう。

「大丈夫！ 京祐ならきつとできるって！
そう……信じたい」

なんだか最後の一言がいらぬ気がするが、うだうだと無駄な時間を使っても意味が無い。

俺が「やってやるよ」と言うと、奏は「その意気だよ！」と右手をグツと胸の前で握りしめた。

「とりあえずは、覇弾を覚えなきゃだな」

「覇弾は簡単だから安心してね。」

最初は手のひらだけに身纏をかける感じで、次に纏った覇気を一点に集めてみて」

右手を開き、そこに覇気を纏わせようとする俺。

奏に言われた通りにしようも、手のひらだけに身纏をかけるのが中々上手くいかない。

全身にかけることはないが、それでも手のひらだけでなく腕まで纏ってしまう。

意識を研ぎ澄まし、徐々に、徐々に。

手のひらの一点に、覇気を集中させていく。

「この感じが……」

俺は手のひらを握ったり開いたりしながら、その感覚を覚える。

「そしたら、手のひらに集めた覇気を切り離すんだけど、これはイ

「イメージが必要なの」

「イメージ……？」

「転換属性もそうだけど、全ての術はイメージが大事。
京祐、思い出してみて？」

「身纏が出来た時、身体に覇気を纏うイメージをしなかった？」

「確かにあの時、身体の中から外へ覇気が出るイメージをした気がする。」

「それによって俺は、身纏が出来るようになった訳だ。」

「確かに、覇弾もまた同じようにやれと？」

俺の問いに、奏はしっかりと頷いた。

「右手のひらを近くの木に向け、目を閉じイメージをしてみる。」

「手から放たれるイメージ。」

「ぼんやりとしたイメージから、より鮮明に。」

「その時だ。フツと右手に纏わせた覇気がなくなり、ズドンとした衝撃音が耳に届いた。」

「出来た……」

「やったね、京祐！」

「木の幹には凹んだ跡がくつきりと残り、衝撃によって葉が周りに落ちていた。」

「最初からこんなに威力が高いなんて……、京祐は法術の才能があ

るかも」

なんと俺のやる気を引き出す言葉だろうか。
才能なんてものが俺にあるのかは分からないが、言われて気分悪くない訳がない。

それが表情にも出ていたのだろう。

奏は「その調子で次は転換属性やってみよ！」と、完全にペースを掴まれた。

「で？ 転換属性っていうのは？」

「転換属性は、さっき言った炎、水、風、土の力に覇気を変換させるの。」

今やつてもらった覇弾は、属性無し……つまり無属性に位置する法術で、変換無しで出来るんだけど、属性を付与することで飛躍的に威力等を上げることができるの」

「つまりは覇弾よりも難しいって訳か」

ようやくと言うか遂にと言うか、俺も火や水を出す時が来たようだ。

「覇弾の時の様に、これもイメージだよ？」

火なら強く燃え盛る炎を、水なら流れていく川や海を、風なら吹き荒れる突風を、土なら揺らぐことのない硬い地面を。

それが術の発動に繋がるからね」

言ってることは分かる。

分かるが、上手くいくかどうかが不安だ。

先程と同じように、まず右手のひらに覇気を集中させていく。
問題はそこからだ。

目を閉じ、頭の中に火をイメージしてみる。

イメージ……イメージ……イメージ。

燃え盛る炎……、どれくらいの火力だろう。

基準が分からないまま、とりあえず大火災をイメージしてみた。

何物も焼き尽くす紅蓮の揺らめき、肌に感じる熱気。

目を焦がす、一面の朱色。

「京祐……ホントに才能あるよ……すごい」

奏の溢した言葉。

それに気付いた俺は目を開く。

そこには、手のひらから立ち上る火の手。

不思議と熱くはなかった。

恐らくは俺自身の覇気から創られたからだろうが。

「これからどうすればいい？」

「放っていいよ、私が消すから」

奏は言うと同時に右手に水の塊を創り出す。

それを確認した俺は、右手を地面に向け霸弾同様に放った。

火の玉は地面に着くと一気に燃え盛り、広がる。

「——！！ 水法、水界壁！」

奏は用意していた水じゃなく、咄嗟に地面に手をつけそう言った。
直後、燃え盛る炎の周りを囲う様に水の壁が出現し、内側に雪崩こ
む。

「……危なかったぁ……」

完全に火が消えたのを確認すると、安堵のため息を吐き出す奏。一体何が危なかったのだろうか？

「急にどうしたんだ？　慌ててたように見えたけど？」

「慌てたよぉ！　あんなに範囲と火力が強いなんて思ってたから……」

「それは褒められたって受け取ればいいのか？　それとも謝るべきか？」

「いや、喜んでいいよ？」

やっぱり京祐は法術の才能があるよ。

霸弾にしろ、火炎にしろ、質がすごくいいから」

素直には喜べない状況だった。

なんか悪いことをした気分だったからだ。

「京祐、今のが炎法の基礎、火炎。

単純に霸気を転換させただけの法術だよ。

次は、水ね」

「あ、ああ……」

奏自身、今の出来事は気にしていないように思える。

寧ろ、次の転換を心待ちにしているかのような、そんな微笑を浮かべている。

奏が気にしてないのなら、今の俺がすべきはただ一つ。全力で転換属性を覚えることだ。

「……………（流れる水、激しい流れは硬い物すら削り、押し潰す……。このイメージだ）」

最大限考え得る強いイメージを、より事細かに、より核心に。自分の中にそれが出来上がり、その結果として右手に水流が渦巻いた。

「水属性、出来た……」

右手に変換した水流を、先程放った火炎の場所と同じ所に放つ。放たれた水流は地面を削り、圧力によってそこを凹ませる。パンツと水流はただの水滴へと拡散し、周りの地面へと吸われていった。

「これが水法の基礎、水撃。
京祐、その調子で次は風ね」

奏は法術の名称を挟みながら、属性を指定する。
俺は言われた属性をイメージし、右手の覇気を転換させていった。

転換属性をやり始めてから、約二時間。

その後、風法、風弾。土法、岩塊を成功させた。
法術は覇気を消費させて放つ為か、若干の疲労を感じながらも俺は奏の話に耳を傾けていた。

「これで京祐も無、炎、水、風、土の五大眷属を使えるようになったね。」

意外と簡単だったでしょ？」

「まあ、そんなには難しくなかったな」

鼻高々とまではいかないが、少しばかり天狗になっていた俺。
だが、そんな俺の鼻っ柱を、奏はすぐさまへし折った。

「そりゃ六歳から七歳くらいの子供が出来るくらい簡単だからね、
出来てもらわなきゃ困るよお？」

グサリと胸を突き刺す言葉の刃。

俺の過信をものの見事に消し去った。

世界は広い。何故か頭に今更な言葉が浮かんでいた。

「さて、少し休憩したら次の課題があるからね」

「今度は何歳だ？」

「今度はねえ、十歳から十四歳かな」

皮肉を言っただつもりだったが、あっさりと奏は躲した。
そんな自分が、空しかった。

「覇気には身体能力を上げる効果があるのは分かるでしょ？
その応用編ってところかな」

「身纏とは違うのか？」

そんな俺の素朴な疑問に、奏はクスリと笑う。

「確かに身纏は身体能力を上げるけど、それとは少し意味の違う身体能力を上げる術を覚えてもらいたい。今から私が教えるのは、“細胞活性”」

「細胞……活性？」

細胞とか活性とか、科学の授業でしか聞かない響きだ。

「つまりは自然治癒力の向上ね。循環速度を高めて、細胞の活性化を促進させるの」

「傷が早く治るとか？」

「ものすごく簡単に言えばね」

なんとも素晴らしいが、そういった類いには何か裏がある。それが世の常だ。

そんなことを思っていた俺の顔を見た奏は、ニコツと笑つと「さすが京祐、察しがいいね」と言ってきた。心を読まれた。というよりは表情に出ていたのだろう。顔に出したつもりはなかったのだが……。

「で？　なんかあるんだろ？」

奏に対抗した訳ではないが、俺も軽く笑いながらそう言った。

「傷が早く治る……、聞こえはいいけど裏を返せば無理矢理早くしてるだけ。

受けるべき苦痛は、受けなきゃいけないの。京祐なら、この意味わかるよね？」

「ああ、俺の能力のリスクみたいなもんだろ？」

「そういうこと」

俺の理解が早かったからか、奏の表情は満足気だ。

奏は「じゃあ、細胞活性をやってみよっか！」と俺の手も取り刀をあてがう。

「ちょ……っ！　　危な「大丈夫、指先を少し切るだけだから」

慌てふためく俺の手をがっちりと掴み、冷静に言い放つ奏。

正直、バツサリ斬られるかと思っただ。

奏に限ってそんなことある訳ないのに。

冷静じゃない人間ほど、バカなものはないなと俺は痛感していた。

プツツと右手人差し指の腹を刀が軽く触れ、じんわりと血が滴る。ピリピリとした痛みが指先を走り始めていた。

「これでよし。京祐、この傷を細胞活性で治してもらっからね」

「これもイメージか？」

「うーん、なんだろう……、血流に覇気を流す感じ？」

右手を顎に添えて、疑問符を返す奏。

疑問符を疑問符で返されることほど不毛なやりとりもないだろう。

「いや、俺が聞きたいんだけど……」

「コツを掴まないと案外難しいかも。

私達は生まれた時から覇気を知り、触れ、使ってきたから感覚でできちゃうんだよね」

アハハ〜と笑いながら奏は言うが、俺にとっては笑い事ではない。皆が出来ることを“出来ない” んじゃ話にならないからだ。

「さっき言った年齢だけど、あれは“その年齢までに覚えなきゃならない” 訳じゃなくて、“その年齢までには勝手に使える様になつて” って年齢なの。

物心ついた時から出来る子もいるくらいだし」

「マジか……」

だいぶ行き詰まってしまった。

体が自然と覚えるものを、俺は今から自分の意思で覚えようとしている。

それはまるで天才と凡人のようなものだろう。

「こればかりは私も上手く説明できないや……」。

とにかく傷口を治そうとしてみて?。」

「ああ、やってみるよ」

「私はちよつと素振りしてくるね」

俺の返事を聞いた奏はそう言い、少し離れた場所で素振りを始める。恐らく、俺がより集中できる環境を作ってくれたのだろう。その場に座ると、俺は傷口を見てから集中する為に座禅を組んだ。

「……………（傷口を治す……………血流に覇気を流す……………）」

曖昧すぎる為かイメージすら湧かない。

何をどうするか、覇気を使うにあたって俺が導きだした答えはそれだった。

だが、これに限って言えば“覇気を血流に流す”のと“傷口を治す”の間にはなんらかのステップがあり、それが分からなかった。

集中を高めるにつれて、奏の空を切る音が遠ざかっていく。

自身の覇気を感じ、その流れを知ることが出来た。

その次にすべきことを俺なりに考え、実行していく。

指先にある傷口に覇気を集めてみてが、ダメ。

傷口のある指全体に覇気を集めてみても、ダメ。

試行錯誤が続き、時間も忘れて糸口を探し続けた。

——その時だった。

最終的に辿り着いた答えが、見事に的中したのだ。指先は熱くなり、ビリビリとひどい痛みを帯びる。

「——ツツ」

痛みと熱が引き、指先を確認してみると先程まであった傷は、綺麗に治っていた。

「この感覚か……」

俺が辿り着いた答え、それは覇気を傷口内部で拡散させることだった。

粉々に、傷口のある部分に広がる様に。

細胞一つ一つに覇気を塗す感覚だ。

“細胞活性” とうにか俺は出来たようだ。

しかしながら、このリスクは相当なものだ。

ちよっとした切り傷を治すのに、顔が若干引きつるぐらいの痛み。なるべくなら使いたくはないものだ。

「奏！ なんとか出来たぞ！」

「本当に！？ 凄いね！」

奏は刀を鞘に収めると、駆け足で俺に近づいてきた。

それはそれはなんとも可愛らしい笑顔で。

嬉しさが顔いっぱいに溢れていた。

「よかったあ、出来なかったらどうしようかと思ったよ」

「ま、出来たからいいじゃん」

「そうだね。京祐ならやれるって信じてたし」

二人とも一息つく為に木の根元によりかかり、座る。

朝から始まった勉強会は、太陽が真上から射すほどの時間になっていた。

「少し休憩したら帰ろっか！」

「そうだな、腹減ったし」

俺は腹に手をあてながら言つと、奏は「私もお腹すいたよお」と笑いながら言う。

俺は久しぶりに充実した時間を過ごしていた。

初授業

翌日の朝、奏の声で俺は起きた。

本日より、俺の新たな学園生活が始まるのだ。
しかして一つ問題がある。

それは……。

「すごく辛いんだが……」

学園に持っていていかなければいけない教材達だ。

昨日届いたのだが、その量がハンパじゃない。

それを両手に抱え、今、学園に向かって歩いていく訳だ。

「もうすぐだから頑張つて。初日だし京祐はヘタしたら全部使うかもだから、持っていていかなきゃ」

それを朝にも言われ納得した俺だったが、今更ながら考えると使わないかもしれない。

もし、使わなかったら……それは考えないでおこう。

今集中すべきは、胸の前でタワーと化した教材のバランスだ。
重さ、高さ共に十分すぎるものだったが、身纏を使うことで多少だが楽にはなっていた。

「京祐はさ……」

そんな俺に、不意に奏が話しだす。
その声色はどこか真剣な様子だった。

「お化けって……信じる？」

前言撤回。

全くもってふざけた質問が飛んできた。

「お化け？　んなもん信じない。
第一、俺は実際に斬れ……いや、なんでもない」

「えっ？　実際に何？　まさか見たとか！？」

「実際に見たことがないからな、信じてないな」

危つく口を滑らすところだった。

奏には聞こえてなくて本当によかったと、安堵の息を漏らした。

「でもね、京祐。最近ちょっと噂になってるんだよ。学園の中にお化けが出るって……」

奏の言い方は、間違いなく恐がらせようとしている言い方だ。
だが、何故だか笑えてきてしまう。

必死にビビらそうとする奏が健気すぎて。

笑い声がこぼれ、それを聞いた奏がこれまた必死に取り繕い始める。

「いや、あの、恐がらせようとかじゃないからね!？」

まるでデジャヴだな。

そうこうしている内に、例の門が見えてきた。

奏が言うには、学園長に合格をもらった時点で俺の覇気は登録されているらしい。

つまり、すんなり入れるということだ。

けど、正直なところ先日 of 危機一髪がトラウマになっている俺は、背筋に抜ける悪寒に若干身震いを覚えた。

「俺はお化けなんかよりも、この門のが怖いね」

軽く笑いながら言うと、奏は「お化けのが絶対怖いよ!」とか言いつつ、サラッと門を抜けていった。

俺もそれに続いて門を抜けた。

後で気付いたが、手汗をじっとりとかいていたのは秘密だ。

校舎に入り、奏と共に教室へと向かう。

どうして奏と二人で教室に向かうかと言うと、昨日届いた教材と一緒に入っていた紙に、どこのクラスになるのかが書いてあった。

そのクラスは奏と一緒にのクラスだったというわけだ。

恐らくは学園長の配慮だろう。

「全く、学園長もお人好しというか、お節介というか……」

「私は良かったと思うよ？　実際、別のクラスだったら相当大変だ
と思うし」

「まあな、ここは素直にありがたいと思うべきか」

「そうそう」

ニコニコと笑い合いながら教室に向かって階段を上っていると、俺
の横を背の低い女の子が通りすぎていく。
だが、何かに気付いた様子で急に足を止めて振り返った。

「想律さん、おはようございます」

「あつ吹雪ちゃん、おはよー」

奏の知り合いだろうか。

その女の子の名前は吹雪と言らしい。

蒼く澄んだ長い髪が、太陽の光を受けて輝いていた。

その時、不意に彼女の視線がこちらに向く。

まるで品物を見定めているような視線。

くりつとした青い瞳に、俺は何も言わず黙ったままだった。

「坂上さん、おはようございます。」

同じクラスなんですネ、私は柊　吹雪と言います。

よろしく願います」

「こちらこそよろしく……って、なんで俺の名前知ってるんだ？」

俺は初対面、なのに彼女は名前も知ってるし、果てはクラスまで同じだと言った。

どういうことかサッパリ分からなかった。

「吹雪ちゃんはねー、能力者なの。」

見たものを理解する力を持つてるんだよ。

因みに、私より強いのに年齢で言えば三つも下だよ？」

「はあああ!？」

色々と言いたいことを差し置いて、俺の口から出たのはそれだった。

「と、いうことです。理解できましたか？」

彼女は至って冷静に、微笑しながら尋ねてきた。

それにはさすがに頷くしかなく、必死になって頭の整理を進めた。

「なんか凄い能力だな……。」

というか、便利すぎるだろ」

「そうですね、便利といえば便利。けれど、他の方からすれば妬みなどの対象でしかないものです」

「……悪い。そういうつもりで言ったんじゃないんだ」

彼女の言う“妬み”とはきっと、限りなく悪意に近いものなのだろう

う。

俺は自然と謝罪の言葉を口にしていた。

「私もそういう意味で言っただ訳ではないのです。
こちらこそゴメンなさい」

律儀に頭を下げた彼女。

そんな微妙な空気を打ち破ってくれたのは、もちろん奏だ。

「じゃあ、吹雪ちゃんも一緒に教室行こ！」

俺と彼女：吹雪の背をグイッと押し、「席はどこだろうねえ」と他愛ないことを言ってくれた。

“頼もしい”その一言に尽きる行動力だった。

教室に入ると、俺の口は自然と開いた。

「新手の嫌がらせか何かか？」

多分、というか、絶対。

俺の席だと一発で分かるように、『坂上京祐の机だぞ。自由に使ってくれby学園長』と机の上に看板が立てられていた。

「さすが学園長だね。気を使ってくれたみたい」

「誰の目にも明らかな看板ですね」

奏と吹雪はこらえきれずにクスクスと笑いながら言う。
もちろん、他の人に至っても同じだ。
すぐさま俺は看板を外しにかかった。

「つたく、何を考えてるんだか……」

俺の口からはため息しか出ない。

初日に自己紹介をせずに名前を知られることとなった。

俺の席はというと、一番後ろの窓際。

隣に席はなく、孤立している感じだ。

幸い、前には吹雪、右斜め前には奏がいる。

分からないことがあれば聞けるだろう。

ほどなくして、担任であろう教師が入ってきた。

すらりとした体型に身長180センチはあるだろう。

黒髪短髪でこれまた黒のメガネ、グレーのスーツがよく似合う男性教師だ。

「みんな、おはよう。今日は授業の前にお知らせがあるからな……
と言っても大体想像がつくだろうがな」

そう言うときチラッと視線が俺とぶつかった。
すると、朝の事を知ってる人達は思い出してか、クスクスと笑いをこぼした。

「坂上京祐…だったな。本日からみんなクラスメイトになる。
分からないことも多いだろうから、みんなで支えてやってくれ。
じゃあ、坂上、軽い自己紹介を頼む」

そう言われ、一応念のために立ち上がり自己紹介を始める。

「坂上京祐です。学園内のこととか、まだ右も左も分かりませんが、
よろしく」

本当に軽い自己紹介を終えると、周りから「よろしく」と返事が返ってきた。

それに合わせ、教師が口を開いた。

「俺はこのクラスの担任で、一条 桐翔だ。よろしくな、坂上」

「よろしくお願いします」

自己紹介も終わり、「授業始めるぞ」と教卓の下から教科書を取り出し、読み上げ始める一条。一条の読み上げる内容。どうやら能力の説明の様だ。

「いいかあ、能力に同一はない。

似たような能力でも、使い方が似てるだけで本質は違うわけだ。以前やった能力の覚醒についての中でも説明したが、能力を使うリスクも大小様々ってことだ」

「リスクは絶対負うんですか？」

生徒の一人が質問を投げ掛けると、一条はすぐさま答えを返した。

「絶対だし絶対ではない。ここら辺のことはまだ解明中の部分でな、ようは能力の使い方次第ってことだろうな」
ふーん、なるほど。

一条と生徒のやりとりを聞き、能力者としての知識を得ている俺。奏はここら辺のことは独学で知ってるらしいが……。

と言っても所詮は独学。それ故に、俺に能力を使うなと言うのだろう。

自分の能力ならまだしも、他人のそれも大して情報のない能力を扱わせるなんて、至難だ。

だからといって、いつまでも使わないわけにもいかないだろう。

一条の言うリスクの大小は使い方。

ここにヒントを見いだし、俺にとってまだ早い授業を聞き流し、能力の理解に努めることにしたのだった……。

「じゃあそろそろ時間だからこのくらいにしよう。
休憩時間挟んだら、次は戦闘訓練だ。
皆、遅れずに闘技場にこいよ?」

一条の言葉は、俺には届いてはいなかった。
なぜなら――

――寝ていたからだ。
集中していたんだが、何分眠くなりそのまま寝てしまったらしい。
奏に起こされたときには、一条の姿は教室になく生徒の半数もすでに
闘技場に向かった後だった。

「もう、初授業で寝るって……はあ……」

奏は手のひらで顔を覆うと、諦めの混じった声でそう言った。

「まあ仕方ないじゃん。眠くなっちゃったんだからさ」と俺が気が

楽全開で言つと、食い気味に「バカっ!!」と奏にどやされたのだ
った。

闘技場に着き、俺が一番始めにしたこと。
それは――

「ふあああ……………あふ」

これまた睡魔の右腕である欠伸。
どうも集中していたのが疲れたらしい。
そんな姿をじとーっと奏が見ていたが、触らぬ神に祟り無しとばかりに流した。
しばらくして、一条が闘技場に姿を見せ。
二度目の授業が始まった。

初対決

戦闘訓練。

俺の予想を裏切り、武器の使い方を訓練するようだ。
てつきり術による訓練かと思ったのだが。

「戦闘訓練は武器と纏術、射術訓練が法術かな」

奏の言葉に納得し、頷く。

魔物のはびこるこの世界にとって、武器や術は唯一の攻撃手段となるもの。

同時に防御手段でもある。

それらを用途によって分けることで、個々の使い方がより深く教えられるというわけだ。
中々に合理的だろう。

「しかし、なんか生徒数多くね？」

さつきから見てるに、明らかにクラスの生徒数より多い生徒が闘技場にいる。

そんな俺の疑問はすぐに払拭された。

「今回は2 - Bクラスの担任の古城先生が用事で外に出ているから、

合同訓練になっている。

授業の最後にはクラスから代表を募っての試合も計画してるからそのつもりで。

じゃあ、各々訓練を開始してくれ。

アドバイスが欲しい人は俺のところに来いよ」

一条の合図と共に一気に活気づく闘技場内。

一緒に組もうだとか、戦おうぜだとか。

そりゃもう活気というより熱気に近い。

まあ、授業の最後に対抗試合があるのだからそれも仕方ないだろうが。

「それじゃあ、京祐は私と組もつか！」

「いいぜ、だけど本気でこいよ？」

挑発してみると、奏は不敵な笑みを溢したわけで。武器のない俺に、そのままの表情で刀を渡した。

「ホントのホントに本気でいいんだね？」

「もちろん、試したいこともあるしな」

そう言うと奏は「ふーん」と余り期待のしていない声色で言うのだった。

その余裕、崩してやろうではないか。

刀を構え、どちらともなく身纏を使う。

もつと……もつとだ。

奏の初速を捉えるには、こんな質じゃ足りない。

術の基礎構成が覇気量と想像力ならば、もつと出来るはずだ。
より隅々まで、内から滲みだす覇気を纏う。

これでいい。そしてもう一つ、能力を使わせてもらおう。
さあこい！！

———と思ったところで、「ちよつと待ったあああ！！！」の声。
なんだ、邪魔する奴は。

視線を声のした方に向けると、一人の男が視界に入った。

「想律、俺と戦え！！」

唐突すぎてワケわからん。

こいつは誰だ？

というか、俺が戦おうとしていたのが見えなかったのだろうか？

「また？ いい加減負けを認めてくれないかな？」

奏はこの男を知ってるらしい。
なんでも二学年で三番目に強い実力者だとか。
そんな男が奏に勝負を挑む……それってつまり。
学年で二番目に強いのが奏だからということだろう。
更に言えば、その奏より強いのが吹雪ということになる。

話を戻そう。

なぜにこいつは奏と俺の勝負を邪魔したか、だ。
せつかくの身纏も消え失せ、やる気までもが削がれた。
とりあえず、奏がどうにかしてくれそうな雰囲気だから任せてみよう。

「俺は今日こそ勝つ！！ 秘策を使つてな！！！」

おい、こいつ今なんて言った？
秘策って言ったぞ？

秘策は秘密の策略だから秘策って言うんじゃないのか？
そうか、アホなんだな、こいつ。

勝手に解釈をして行く末を見守ることに。

「はぁ……、清水君さあ、秘策って意味分かってるの？」

奏もやっぱり引っ掛かったのか！！

「それに、今は京祐と試合をするつもりだから無理」

「だったらそいつの前に俺と戦え!!」

もう哀れとしか感じなくなってきた。

なんつー利己的な考えの持ち主だろうか。

疑問や苛立ちは俺の中から完全に消えている。

そこまで思わせるほどの実力者とは。

「だあかあらあ、清水君とは戦わないって言ってるの分かる!？」

奏の苛立ちが伝わってくる。

それは家で俺が柔軟していた時に怒ったような気遣いや心配の混じった声じゃなく、あからさまな程に嫌悪感を全面に押し出した声。

そこに清水からのトドメの一言。

「なんだよ逃げんのか？ 負けんのが怖えならそう言えよ！
時間がもったいねえ」

——俺の中で何かが切れる音が聞こえた。

「なんでそうな——」「うつせえ野郎だな、お前は家にでも帰って秘

策を辞書で引いてる」

「なんだお前は？　なんか言っただかよ？」

俺の挑発に見事に乗ってくれた清水。

奏には悪いが、俺がでしゃばらせてもらうことにする。

「聞こえなかったのか？　俺がお前の相手をしてやるって言ってるんだよ」

「ちよつと京祐！！」

「いいだろう、てめえを倒せば想律もやる気になるだろうよ！」

奏を余所に、俺と清水は対峙する。

金色短髪に金眼、身長は高く俺の身長より頭一つ分くらい違つ上に
ガタイまでいい。

さて、どうしたもんかな。

「逃げるなら今だぞ？」

「誰が逃げるって？」

互いに身纏を使い、互いに闘争心を昂ぶらせていく。
奴は武器を持たず、しきりに拳を握ったり開いたりを繰り返している。

どうやらイメージ通りの己の拳が武器、のタイプだ。
ならばリーチはこちらの方が有る。

逆を言えばリーチがある分、懐に入られたらマズイな。

「どうした、ビビって動けねえのか？
ならこっちから仕掛けるぜ！！」

来るか！？

「——！！？」

奴の言葉が耳に届き、刀を構えた刹那。
目の前にいた姿は消え、その次に聞こえた音は真後ろからだった。

「——左脇腹もらった」

咄嗟に刀を左腕に添わせガードを試みたが、瞬間の衝撃と共に体が
ふわり浮いた。

そのまま数メートル右に飛ばされた。

なんとか立ち上がり、右手を離れた刀を探す。

幸いにも近く転がっていて助かった。

「随分鈍いな。欠伸が出ちまうぐらいだ」

「チッ！」

さっきの衝撃で俺の左腕は使い物にならなくなっていた。少しばかり指先を動かそうものなら激痛が左腕を襲う。

あー、ダメだ。

どうしたって負けたくない。

一生使わないって決めたのにな……。

右手で刀を拾い上げる俺。

そんな俺を見て、奏は声を上げる。

「——京祐！？」

そりゃ驚くよなあ……。

後で誤魔化しとかないとな。

まあ、今は……

——目の前の奴をぶちのめす!!!

「刀を逆手に……さっきの一撃で頭が狂ったか？」

「そう思うか？　ならお前の方が頭が狂ったみたいだな」

「面白え、言つとくが俺は能力者。

てめえなんかじゃ追い付けねえよ、この……“加速”の能力にはな
!!!」

姿を消した。

能力者だったのか、なら俺も使わせてもらう。
空間固定、時間停止。

これを使って攻撃するわけじゃない。奴の位置を把握する。
バカの一つ覚えみたいにまた後ろか。

固定解除、停止解除。

すぐさま右脇から後ろに向かって突きを出す。

「な——!!!」

そんな攻撃を奴は、左の拳を以て刀身の横っ腹を叩き、ギリギリの
ところで逸らした。

逸らした直後に一気に加速、右の拳を振るう。
位置さえ分かれば攻撃なんてのは読める。

しかも布石として放った突きがあるなら尚更。
刀を引き戻しながら軽くしゃがむと、頭の上を空気を切り裂く音と
一緒に拳が素通りした。

「クッ!!」

悔しそうな声が聞こえた時には、俺の攻撃はすでに行使されている。
左脇腹から後ろに向かって一気に突きを放つ。
読み通りならば、アイツの体勢はグラグラ。
それこそが俺の狙いだ。

「ガハッッ!!」

狙い通り、俺の突きはアイツの腹部へと刺さった。

アイツの身纏と刀に覇気を纏わせてるから、打撲程度だが充分なダメージだろう。

けどこれだけじゃ終わらないのが俺の剣術だ。

腹部へのダメージが色濃い内に、刀をまた引き戻し体の正面をアイツに向ける。

次に狙うは顎。

打ち抜くが如く、刀を振り抜いた。

「——ッッ!!!!」

打ち抜かれた痛みと腹部のダメージに、清水は声すら出ていなかった。

ヨロヨロと後退りをする清水。

アイツの視界は歪みきっていることだろう。トドメを……。

クツと握る力を軽く込めて。

未だにヨロつく清水に、ゆっくりと。だが確実に近づき俺のエリアへと入れようとした——時だった。

「——アアアアアア——！！！！」

怒りなのかなんなのか。

咆哮に似た叫び声を上げる清水。

けどそれだけじゃないな……。

今まで以上の覇気を纏っているのが見て取れる。

「クソがツツ！！　なんなんだデメエは！！！！」

「なんなんだと訊かれてもな。

お前こそやつと本気になったってことでいいのか？」

「ああ、本気でやってやるよ！

後悔すんなよ？　俺を本気にさせたことを！！」

その言葉通り、清水の纏う身纏の覇気量たるや先ほどなど比じゃない。

更に、纏われた覇氣がその色と形を変えた。

「——炎纏！！！」

燃え盛る炎の鎧を身に纏い。

揺らめく空気がその熱気を俺に伝えた。

「それが秘策か？」

「そうだ！！ テメエなんかには勿体ないが仕方ねえ…… 一気に
決めさせてもらうぜ！！」

瞬時にその場から消える清水。

残念だが、いくら速くいくら強い技だろうと、当たらなきゃ無意味
なんだよ。

空間固定、時間停止。

今度は正面突破か…… いや、体の重心が右に傾いてる。

右側からの攻撃だな。

固定解除、停止解除。

「ガハッ！！！」

「クツ!!」

解除した直後。

俺は切っ先を右側に向けて、目一杯の身纏で力を底上げし踏張る。清水は読み通りに右側から攻め、その拳を振るった。

結果から言うなら俺の勝ち。

刀のリーチと腕のリーチ、どちらが長いかなんて分かりきってることだ。

奴の拳が俺に届くことはなく。

俺の刀が奴の腹部にめり込んだのだ。

猛スピードで自ら固定された刀に突っ込んだ形となり、勢い余った体は逆方向へと向かう先を変えて。

そのまま吹き飛ばされた。

そんな勢いを受けたこちらも、若干だが押されていた。

「俺の勝ちだな」

そう言うと、清水からはなんの返答もなく。

よくよく見てみれば、清水の意識は先の一撃で完全に刈られている。ツカツカと俺は近づき、言ってやった。

「——相手した時間がもったいなかったな」

気絶している奴に言ったところで返事などなく。
と、思った矢先に違うほうから返事が返ってきた。

「すげえぞー！！ あ清水を倒すなんて！！！」

「坂上やるなあ！！！」

などなど。

いつの間にか自分のクラスの人達を始め、2 - Bの奴等まで俺に賞賛を投げ掛ける。

それほど、清水という男は強いとされていたのだろう。

なんだ？

物凄い強烈な視線を感じる……。

ふと横を向くと、案の定怒り気味の奏様がいるワケで……。
いや、違うな。

怒ってるワケじゃない。

問いただしたい。その一点が濃厚になっているんだ。
だからこんなにも強い眼差しで俺を見てるんだ。

「京——「分かってる。ちゃんと説明するからさ」

奏の声を遮る形になったが、それでも奏は「うん……」と頷いてくれた。

さて、どこまで問われるかな……。能力のことだけだったら楽だけど。

どんな質問を訊かれるのか、そればかりが頭を占めていた。

俺の秘密

「で？ きちんと説明してくれるかな？」

本来ならばくつろぎ、和めるはずの家の中。

そんな中でお怒りな方が約一名。

腰に手を当て、仁王立ちする奏様がいるワケで。

ニコニコ笑いながら訊く奏様が、これまた怖いワケで。

そんな雰囲気のせいかな、俺は自然と奏に向かい合い正座をしている。
この状況が出来上がったのは15分前——……。

残った授業をそつなくこなし終えて帰宅中。

前を歩く奏の後ろを俺がついていく。

二人の間に会話はなく、あるのは重い空気と時折吹く風だけ。

戦闘訓練以後、なんとなく俺からは話しかけづらい状況が続いていた。
た。

奏も奏で、訓練授業が終わってからは話しかけてこなかった。

まあ、クラスの生徒に俺がもみくちゃにされていたせいもあるだろうが……。

自宅に着いた直後、先に入った奏がクルツと体を翻し笑顔で言う

きた。

「全部話してよ?」と。

今まで訊くのを、我慢していたのかは分からない。
分からないが、不機嫌なのは分かる。

「何を話せばいいんだ?」

「もちろん、清水君との試合について。
何か、私に隠してることもあるよね?」

そして奏の威圧感に負けた俺が無意識に正座し、この状況が完成された。

「全部……ねえ。そう訊かれると何から話せばいいかねえ……」

この言葉は半分本心半分策略。
こんな簡単な策略にハマってくれる保証はないが、その時はそんな時だ。

「じゃあまず一つ目、能力を使ったよね?」

「ああ、使ったな。というか、奏との試合に使っはずだったけどな」

「体は……大丈夫なの? それが心配で……」

「それは大丈夫。一条先生が言ってたろ？ 用は使い方だつてことだ」

あの時、俺は能力を使った。
空間固定、時間停止を。

確かに使えばリスクを伴う。
けれど“使い方”が違う。

固定し停止したその場所を動けば、解除した時の反動を一気に負荷することになる。

しかし動かなければ？

反動を極力抑えることが出来るはず。

その考えは見事に成功した。

「て、ワケだ。全く微動だにしないなんてのは無理だったから、筋肉痛程度の痛みはあるけどな」

「そつか……、よかったあ……」

眩きと共に、その場に腰を下ろす。

俯き、安堵の息を漏らした奏。

そこまで心配してくれてるとは……。

俺はまた無意識に奏に気負わせてしまった。
その罪悪感が滲みだす。

「悪かったな、心配させて」

「うっん、京祐が大丈夫ならそれでいいから」

「……そっか」

素っ気ない返事をしたが、物凄く嬉しかった。
ただただ、嬉しかった。

そんな思いに浸るのも束の間、奏はすぐさま口を開く。

「京祐、あの剣術はどこで習ったの？」

「……………。え…………？」

奏の表情を見ると、この質問こそ本命だと言わんばかりの真剣さ。
心の隙間をものの見事に突いた言葉の間に、俺の口からはそんな素っ頓狂な声が出てしまっていた。

よくよく思い返してみれば、奏は最初に「まず一つ目——」と、そう言っていたじゃないか。

上手く切り抜けたと思ったのは、ぬか喜びだったというワケで。

「剣術？ なんの——」京祐は能力を使ってまで勝ちたかったんだよね？
その状況で刀を逆手に持った。

つまり、その持ち方が京祐にとっての持ち方なんだよね？

でも普通なら逆手になんて持たないし、剣を知ってる人なら尚更。
それを踏まえると、逆手持ちの剣術としか考えられないんだけど？」

俺の言葉を遮って出てきた言葉はまるでマシンガンの如く。

的確に状況を見て、それに基づき展開された理論。

探偵 想律奏がそこに居た。

逃げ道なんてのは全て封鎖され、言い逃れ出来る状況じゃなくなっていた。

さすが……としか言い様がないだろう。

「そこまで言われちゃあ言うしかないな」

「一番始めに言ったでしょ？」

“全部”話してもらって」

小悪魔的な微笑を含ませた奏の表情は、見惚れてしまうほど綺麗だった。

夕焼けのオレンジがより一層、奏を大人びて魅せた。

「じゃ、あれはやっぱり剣術なんだね？」

見惚れていた俺は、奏の言葉で我に返る。

なんだろうか、鏡を見ずともアホっぽい表情をしていたことが分かる自分が恥ずかしい。

「俺は坂上流剣術の正統後継者……になるのかな。」

まあ、ちゃんと後継の儀をやってないから、後継者候補ってところもな」

「じゃあ、お父さんが師範なの？」

「そう。物心ついた時から竹刀は持ってたし、同時に剣術を見て学んだかな」

「そうだ、俺は親父の様になりたくて、必死に剣を振るった。勇ましく、凛々しく、刹那の中に生きる動きの一つ一つ。カッコよかったんだ、凄く。」

「逆手持ちの剣術って使い勝手はどうなの？」

「逆手持ちが坂上流の真髄じゃない。」

“居合い”こそ最強と謳うのが、坂上流だ」

「居合い……、じゃあ逆手持ちの意味は？」

もつともな意見だ。

居合いこそ最強と謳うならば、なぜ逆手持ちの剣術が存在するのか。昔の俺も疑問に思っていたことだ。

「片腕が斬られた場合、居合いの型は出来るだろうが、全てにおいて万全な居合いより劣る。」

その際に使うのが、逆手持ちってワケだ」

「でもでも、逆手持ちより普通に振るった方が良くないの？」

「片腕の状況、それは敵が複数名いる状況ってことだ。

その場合、背面もカバーしなきゃいけない。

逆手持ちのがコンパクトに動けるからなんだよ」

「確かに逆手持ちなら背面のカバーもしやすいだろうけど、なんで片腕の状況が複数名の敵がいる想定なの？」

「それはな、坂上流は剣術の最高峰。

一対一ならば斬られることなどない。

って親父は誇らしげに言ってたよ」

自分で言ってるじゃんちゃら可笑しい言い分だが、それでも親父が言うとかっこよかった。

その姿を思い出して、俺は笑った。

「今度さ、私と剣術だけで戦って？」

私、京祐の剣術を見たい」

キラキラと眼を輝かせて言う奏。

女流剣術家になりたいという奏の夢が、その瞳から伝わってきた。

だから俺は「いいよ」と。

もう一言「負けねえから」と付け加えて、二つ返事です承した。

V S 奏―木漏れ日に輝く刃―

翌朝、俺の、いや俺達の居る場所は奏の秘密の場所。早朝に叩き起こされ、無理矢理連れてこられたのだ。寝呆け眼を必死に堪えながら、若干フラつく足元に注意し、森の中を歩いてきた。

「はい、これ。京祐の」

着いた早々に、刀を一本を渡される俺。

ここでようやく、俺の中にあつた歯車が合致した。

昨日今日で剣術勝負をするのだと。

気が早いな、というか早すぎないか？

なんて疑問を思つたのも束の間、奏はスルツと鞘から刀を引き抜く。

「剣術だけの勝負。術の使用は無しだからね」

「いいのか？ 慣れてる剣術を使うなら、身纏ぐらいは使つてもいいんじゃないか？」

「京祐と不公平になっちゃうし」

不公平……ねえ。

身纏は俺も使えるし、どこが不公平なんだかは分からないな。そもそも、奏と俺の剣術のベースが違う。

奏の剣術は身纏を使い、その上に成り立っているはずだ。
ならば、使わないという選択肢は消さねばならないだろう。
その意見をそのまま伝えると、渋々ながらも「わかった」と奏は承諾した。

「ホントの本気でやってよね？」

「ここまで真剣な相手に手を抜くなんて、しねえよ」

「そ。なら、良かった」

「いつでもいいぞ？」

「じゃあ、遠慮なく」

その言葉を皮切りに、奏の覇気はみるみる内に濃度を増していく。
以前とは比較にならないレベルの覇気。
奏の奴、あん時手え抜いてたのか。
で、ことはだ。俺も最大限まで高めなきゃマズいな。
俺もまた、体に今出せ得る最大限の覇気を纏わせる。

さあ、いつくる？

右足を前に出し、膝を曲げて軽く前傾姿勢にする。
左手で鞘を握り、右手を柄にあてがった。

俺は身纏を両目に集中させ、奏を見据えた。

――刹那。

奏は一気に加速。真っ向から勝負を挑んできた。
奏の刀は右斜め下からの袈裟切り。
その動きは身纏のおかげか、見ることができた。
だからこそ、対応できる。

「――居合い“一閃”」

居合い切りで狙うを刀の横っ腹。
ほぼ水平に近い軌道を描き、見事に横っ腹を捉えて弾いた。
辺り一帯に甲高い金属音が響き、奏の表情は驚きに一瞬染まり。
その次ぎは悔しさに下唇を噛んだ。
だが、そこで諦めないのが奏。
すぐさま左手に持ちかえ、攻撃に打って出た。

俺は冷静に刀を受け止め、爽やかな笑顔でこう言ってやった。

「こんなもんじゃないだろ？」

と。

見事な煽りっぷりだと自画自賛したいな、うん。
直後、奏は俺の刀を弾き距離を取る。

「京祐……言っていることと、悪いことがあるよね？」

完璧に怒ってらっしゃる。

これこそ狙いなのだが、やはり色々と罪悪感が降り注いできた。
剣の道とは、何にも揺るがない精神力が力量に大きく関わってくる。
情に流されては、剣筋は鈍り切れる物も切れなくなる。

俺は奏の力を知る為に、あえて煽った。
結果は、多少残念ではあったが。

「ハアアツツ!!」

案の定、奏の刀は大振り。スピードに物を言わせて激しく切り掛かってくる。

このままじゃ、刀が先にイカれるだろう。
俺は攻撃の合間を縫い、刀を鞘に納めた。
勿論、居合いを行う為に。

「居合い“一閃”」

金属音と共に奏の刀を真上に弾く。

これで終わりだな。

確信し、少しばかり気を緩めた俺。

奏が諦める訳ないと知っていたはずなのに。

真上から両手で刀を握り、最高速で振り下ろされたのだ。

「——！！」

咄嗟の出来事に、使う予定のなかった技を出さざるを得なかった。

『空刀居合い』を。

真上からの奏の最高速の振り下ろしを、斜め下からこちらも最高速の切り上げで迎え撃ち。

結果は奏の刀が両手を離れ、俺の勝ちとなった。

「俺の勝ち——だよな？」

一応念のために奏に訊くと、うなだれながらコクンと頭を揺らした。相当シヨックだったんだろうなあ。ガックリと落とした肩と、それに連なっただけ息を吐く奏。

「奏？　大丈夫か？」

「大丈夫……じゃない。悔しい……」

声が震えてる。

それほどに悔しかったのだろう。

昔の俺が被って見えた。

「でも奏はセンスがあるよ。俺は居合いしか使わない予定だったのが、最後の一太刀は使わざるを得なかったからな」

「最後……そう！　あれは絶対に私のが速いと思ったんだけど？」

「坂上流剣術『空刀居合い』」。

鞘に納めた状態じゃなくてもできる居合いだよ」

空刀居合い。

両手両腕両肩を駆使し行う鞘無し居合いだ。

初動、加速を両手で、振り切りを片手で行うことにより、居合い並みの速度を出せる訳だ。

その分、筋肉疲労がだいぶあるが、身纏のおかげか疲労も殆ど無かった。

「京祐は強いね……。どうやったら強くなれるかな？」

「冷静沈着であれ。それだけだよ」

「え……？　それだけ？」

間抜けな表情を浮かべる奏。
そうなるだろうな、確かに。

俺も全く同じ事を言ったことを思い出した。

「冷静沈着であれ、それが親父の口癖でな。
最初は意味が分からなかった。

けど、今考えれば意味が分かる。

いつか、必ず、奏も分かるよ」

俺がそう言って無意識に頭を撫でると、どこか嬉しそうな笑顔になる奏だった。

朝焼けの解明

奏との真剣勝負が終わり、切り株に座って一息つく俺達。早朝から来たということもあって、登校時刻にはまだまだ余裕があった。

「奏はどうして女流剣術家になろうって思ったんだ？」

ふと疑問を覚えた俺は、そのままの勢いで率直に訊いてみた。木々の間を緩やかに流れる風が、奏の髪を撫でたのと共にその答えが返ってきた。

「私の両親が剣術家だったの。

この町じゃ有名なね。

お母さんが道場を開いててね、お父さんがそこに通ってたらしいの。二人はお互いに認め合って、惹かれ合って。

私はそんな二人の下に産まれた一人娘なの。

だから、でもないけど、私は立派な剣術家になりたいの」

奏は微笑みながら、風になびく髪を右手で押さえ。

昔の幸せな一時に浸っている様に見えた。

けど、そんな幸せのただ中に微かな哀しみを垣間見たと思うのは、

俺の勘違いだろうか？

奏の醸し出す雰囲気、その瞳が。

そんな風に見えてしまう。

多分、そんな風に見えてしまうのは、俺の濁った瞳のせいだろうが。

「そつか。奏も剣術家の家系に産まれた一人だったのか。じゃあ、そんな奏に一言を送るよ」

「えっ？ なに一言って？」

「俺の家では代々掲げられてる言葉でな。」

『剣術家を映すは鏡にあらず、全てを映すは己の剣なり。』
つてな。

古臭い言葉かもしれないけど、純粹に為になる言葉だ。
奏はまだまだ剣術家の卵だ、この言葉を胸に精進すれば強くなれるよ」

そう言うとき奏は満面の笑みを浮かべ、「うんっ！」と力強く頷いた。
そのままの勢いをもってして切り株に立て掛けてあった刀を取ると、素振りを始める奏。

ヒュンッヒュンッと風を切る音が、一定のリズムを刻んでいく。

「京祐、私は今回のランキング戦、剣術一本でいこうかなって思っただけど……どうかな！？」

奏の口から出た“ランキング戦”の言葉。

はて、一体なんのことだろうか？

大体の意味は分かるが、全容は見えてこない。

「なあ奏、悪いがランキング戦ってなんだ？」

「……………は……………っ？」

俺の疑問は、素振りをも止め、果ては素っ頓狂な声を上げさせるといつとこまで至った。

驚きの声は何度が聞いたが、ここまで間の抜けた奏の声は初めてだ。

「先生が言ってたで——、あー、そっか、寝てたもんね、京祐」

なにやら奏の中の歯車が合致したようだ。
ウンウンと納得の表情を浮かべている。

ふと、こちらに視線を向け、口を開いた。

「“学年対抗ランキング戦”。通称“ランキング戦”って言って、一年に一度、学年別にトーナメントをやって、ランキングをつけるの」

「なるほどな。奏は前回二位ってワケか」

学年別とは言っても相当な生徒数を誇る学園。

奏によると、まずクラスを代表を決めるらしい。

各クラス代表者三名を選抜し、代表者のみでトーナメントを組む。

トーナメントを勝ち、ランク上位となれば、それ相応の賞品が出る

のだとか。

前回二位だった奏は、この前家で見た解術書を貰ったそうだと。大概の生徒が賞品云々より、学年最強を目指し躍起になるといふほどの一大イベントってワケだそうだと。

俺はその話を聞く以前に爆睡。

今更になって知ることになった。

そういえば、クラス対抗戦だの清水の件だのを考えてみると、ランキング戦があるからあれほど熱気があったんだと思う。しかしながら、一言だけツツコミをいれるならば……

なぜ、清水はランキング戦の前に奏を倒そうとしたのかも、秘策を使おうとしたのかも分からない。

その答えはアホだなと、やはり勝手に解釈して納得する俺だった。

「んで？ そのランキング戦に剣術一本でいくと？」

俺が訊くと、奏は少しばかり戸惑いながら「そうしてみよっかなあ」と、まだ決めかねている返事をする。

前回の戦いっぷりを知らない俺にとって、奏の戦闘力が分からないし、この学年の全体的な強さも分からない。

「奏自身は今の剣術で十分勝てると踏んでるのか？」

「うーん……、どうだろ？
てると思うんだけど……」

私の戦い方はバランスを考えて動い

それからどうやって戦うかを訊いてみると、相手が遠距離タイプならば剣術を主に。

相手が近距離タイプならば法術を主に。

相手が中距離タイプならば法術と剣術を織り交ぜながら戦うらしい。

「なるほどな、で、今回は法術を棄てて剣術でいくか……。
俺はいいと思うぞ？

自分の剣術をより高い位置まで持つてくには、経験が一番だからな」

「そっか！　　そうだよね！　　うん、私、剣術一本でいくことに
する！」

なんともあつさり決めた奏。

目標に掲げた立派な剣術家になるという夢に向かって、奏は木漏れ
日の射す空を見据えた。

「で、京祐はどうするの？　　やっぱり剣術一本？」

「俺は剣術を使わない。使う資格が俺にはないしな」

そう言った後、俺は後悔した。

不用意な発言だった、と。

案の定、奏は「えっ？　なんで？」と訊いてくる。

俺は「いや、こっちの話」とはぐらかしたが、奏は怪訝な表情を浮かべていた。

「まあ、身纏と法術でそれなりに頑張るさ」

「じゃあ、この奏先生が法術を教えてあげよう」

奏はさっきの発言を追及することなく、そう言った。
なんと心強い言葉だろうか。

俺はその言葉に甘えて「宜しく頼むよ、先生」と笑いながら言った。

「そろそろ家戻ろつか。朝食と学園に行く準備もあるし」

「ああ、そうだな」

家に着き、俺は先程借りた刀を返そうとすると、奏は断った。
なぜかは分からない。

分からないが故に返そうとするが、奏が「剣術の稽古つけてもらうから、それは持ってて!!」と、俺の胸に押し付けて、「朝食作っ

「ちゃうね」とキッチンに行ってしまった。

稽古ね、こんな俺が剣を教えるなんてこといいのか？

どうしたって俺はやはり昔を思い出してしまふ。

それでも、純粹に剣術を学びたい奏の頼みを無下にもできない。

どうしたもんかと、頭を悩ませてしまっていた。

「京祐えー、ちょっと手伝ってー」

「ああ、今行く」

不意に呼ばれて俺はキッチンに向かう。

そこには簡単に作られた朝食が並び、それをテーブルまで運んでほしいとの事だった。

二人で皿を運ぶと、テーブルにつき両手を合わせる。

「いただきます」

と、揃って言うと、朝食に手をつけ始めた。

「京祐はさ、元の世界に、未練はある？」

唐突な奏の質問に、俺は一瞬困惑したが、口の中のご飯を飲み込ん

で、静かに答えた。

「未練はある。きちんと別れの挨拶がしたいな」

「そつか、まだ話してなかったんだけど、世界を跨いだ瞬間に、元の世界の坂上京祐という人物の存在がリセットされるの。だから……」

「今、戻っても初対面ってワケか……」

存在のリセット。

そこにいたという記憶の削除だろう。

ならば心残りはない。と言いたいけど、やっぱり少し残念だった。

「話してなくてゴメン……」

奏は箸を置き、俯きながら謝罪した。

でも、きっと、奏に落ち度はない。

色々なことがありすぎた俺の立場からすれば、少しばかり落ち着いた今がちょうど良かった。

アイツらに心配かけてないかとか、そんな俺の心配がこれで杞憂に終わったのならそれで良かったんだと思う。

「でもそれじゃあ、奏がこっちと俺の世界を跨いで平気なのか？」

「私達の世界から行く場合なら大丈夫。」

解橋門っていう世界を繋ぐ門があつて、本来ならリセットされる存在を維持してくれるから」

「そっか。話してくれてありがとな。
ちよつとだけ楽になつた」

「ホントにゴメン。私が巻き込んだばかりに辛い目ばかり負わせて……」

「気にすんな？ 俺はあん時奏が居なきゃ死んでた。
命の恩人だ。俺は感謝しかしてねえよ、ありがとう奏」

俯く奏の頭をワシヤワシヤと撫でると、奏は「ありがと……京祐」と小さな声で言った。

俺は笑顔で「早く食べて学園行こうぜ？」と言うと、奏も微笑みながら「うん！」と頷いてくれた。

それから俺達は朝食を食べ終わると二人で片付け、共にローブの袖に腕を通した。

家を出て学園へと向かう途中。

俺はこの機会に言つてないことはないかと尋ねてみることに。

「言わなきゃいけないことは、もうないかな」

「んじゃ、質問いいか？」

「うん、いいよ」

笑顔で了承してくれたので、早速訊くことにした。

まず一つ目、あのムカデについて。

そっぴや訊いてなかったなあと、先日になって思い出したことがあった。

「あれはこっちの世界にいる生物で、ごく稀に世界を跨いでしまうらしいの。」

原因は今のところ分からないらしいけど。

私はそれを追って解橋門を通り、京祐のいた世界に行ったワケ」

「なんで奏が追ってたんだ？」

これが二つ目。

一介の学生である奏が世界を跨いでまで、何故あのムカデを狩らなければいけなかったのかだ。

「私達の学園は18歳から世界を跨ぐことができるの。
でもそれ相応の力と免許証が必要だけど」

なんでも、ランクが権天使以上のランクの人間が任意で試験を受けることができ、受ければその人個人の免許証が発行され、解橋門を通過できるらしい。

解橋門はいつでも通ることはできないらしく、別世界に行ったムカデと同様な生物の討伐時にのみ通過を認められるという。

一概に聞けば、なぜそんな面倒なところまで行き、わざわざ討伐す

る価値があるのかと訊かれれば、報酬がいいという理由だ。
ちなみにその倍率は、同程度のランクの討伐より、約三倍の報酬だ
そうだ。

「ほう、てか、奏？」

「うん？　なあに？」

「奏って権天使なのか？」

「そうだよ、権天使Cランクだよ？」

あっさり言いやがった。

俺が天使Eランクだから……八段階上ってか！？

なんだか悔しいというより、哀しくなった俺。

それが分かったのか、奏は俺の右肩にポンツと手を置くと、「京祐
ならすぐなれるって！」と慰められる。

奏の無邪気な追い討ちが綺麗に俺の心を撃ち抜いた瞬間だった。

ガツクリと肩を落とす俺を見て「落ち込むなんて京祐らしくないよ
！？」と奏に言われ、「そうだな……」と言いつつもやはりショッ
クだった。

そうこうしている内に、目の前に学園が見えてきていた。

クラス内予選

既にトラウマもなくなった雷門を通りすぎ、自分たちの教室へと向かう最中。

見知った背中が不意に視界に入ってきた。
金色短髪、肩幅の広さ、悠然とした歩み。
間違いなく、清水だ。

俺がアホ認定した彼が、アホとは思えぬ直感力を発揮し、突然立ち止まり振り向く。

「てめえは……!!」

見つけた。アホに見つかってしまった。
だが、驚いたのは、彼の右頬にできたアザだった。

「なんだお前、すっ転んだのか？」

俺が尋ねると、清水は一言「違いよ……」と前置きしてから話した。
す。

「親父にぶん殴られたんだよ。
おもいつきりな」

ずいぶんと怖い父親がいたもんだ。

清水の体格、力があってもぶん殴られる父親の力は相当なもんだろ
う。

一方、奏は奏で勝負を挑まれないと分かったのか、フウと軽く息を
吐き安堵している。

「んで？　なんか悪いことしたのか？」

「違えつての、親父に稽古つけてもらったんだよ。
ランキング戦も近いしな」

「親父強いのが、どんな人だよお前殴り飛ばせる親父って」

「お前も知ってるだろ？」

清水の言葉に、俺の頭の中には？しか浮かばない。
知ってるだろ？

知るワケがないだろう。

昨日、初対面でこれが二度目。

そんな奴の親父なんて知ってるはずがない。

と、思った矢先、隣にいる奏が口を開く。

「学園長が、清水君のお父さんだよ、京祐？」

「……………は……………っ？」

学園長の息子？

こいつの名前は確か清水で、学園長の名前は確か天笠。名字が違うではないか。

なんだ、複雑な家庭環境なのか？

と疑ったが、清水の口から真実が言われる。

「俺の親父は清水 天笠。れっきとしたこの学園の長だったの」

天笠って名字じゃなく名前？
なんつーややこしさだ。

「ちなみに俺の名前は清水 天城アマキだ。
家の家系では、男の名前には“天”の字を入れるってのが風習らしいんだと」

なるほどな。

確かに学園長とそっくりだ、そういえば。

そして、学園長の強さならばぶん殴られるということも分かる。つじつまが綺麗に噛み合った瞬間だった。

「あれ、京祐？ もしかして学園長の天笠っていう名字だと思ってたの？」

「全くもってその通り」

嘘をついても仕方ないので素直に言っと、奏は大笑いしていた。ケラケラとお腹を抱えて笑う奏に、コツンと軽く拳を頭に当てると「アハハ……ゴメンゴメンついね」と、悪びれた様子もなく謝った。

「てかお前、眼の色、黒だったけか？」

ふとそんな疑問が清水から投げ掛けられる。

自分では分からないが、今の眼の色は、黒。

更に訊いてみると、清水と試合した時は銀色に見えたらしい。

奏の時といい、清水の時といい、どうやら戦いになり集中すると眼の色が変わるらしいな。

まあ、それだけのことだが。

清水もそこまで深く考えておらず、「まあ別に関係ねえか……」と頭を掻きながらそう言った。

「おっと、俺の教室はここだった……。
じゃあな」

軽く片手をあげてそう言う清水に、俺も片手を軽くあげ。
そのまま教室に向かおうとした時、清水が呼び止めた。

「おい！ お前の名前は！？」

唐突だったが、「坂上 京祐だ」と名乗ると、「坂上イ！！ ラ
ンキング戦、ぜってえ借りは返すからな！！」とだけ言うと清水は
そそくさと教室の中へ消えていった。

「京祐、さあ大変。清水君はターゲットを京祐に絞ったみたいだね」

なんとも嬉しそうに、満面の笑みで言ってくる奏。

ウキウキとスキップまで始める始末。

全く、先が思いやられるなど、ため息をつかざるを得なかった。

教室に入り自分の席に着くと、前の席にいた吹雪が読んでいた本を
パタンと閉じてこちらに体を向ける。

「おう、おはよう」

「おはよう吹雪ちゃん！！」

「おはようございます。坂上さん、想律さん」

ペコッと律儀にお辞儀する吹雪。

ふわりと乱れた蒼い髪を右耳にかけ、体の向きを前へと戻すと読みかけた本をまた開き、静かに読み始めた。
しばらくすると、一条が入ってくる。

「皆おはよう。今日は突然だがクラス代表を決めることになった。各自、準備して素早く闘技場に集まること、いいな？」

急な授業変更に生徒達は騒つくが、一条は「時間はとってあるが、早くしないと代表が決まらずにこのクラスは不参加になるぞ？」の言葉に、生徒達はきびきびと準備を始めだした。
余程、この一大イベントに皆やる気になっている証拠だろう。
俺達も早々に用意を始め、闘技場に向かうことに。
俺に限って言えば、なんの準備もいらないのだが。

闘技場にクラスの生徒達が揃い、それを確認した一条は声をかける。

「よし、集まったな。皆も知っての通り、再来週に迫った学年対抗ランキング戦。

その為の代表予選会だ。

皆、今の力を存分に使い、出し惜しみなく戦ってくれ。

くじ引きでまず五チームに分けて総当たり戦をやってくれ。

じゃあさっさとチーム分けするぞ」

生徒達是一条の元に並び、次々とくじを引いていく。俺達も引き、俺はA、奏はC、吹雪はDという振り分けになった。

「別々か、良かったってことか？」

「絶対に勝つてよね、京祐？
て、京祐！？ 刀は！？」

「剣術は使わない。まあ、なんとかやるさ。使えるものは使つてな」

「そう……、京祐は機転がきくし大丈夫だと思うけど……、頑張つてね？」

「奏もな、お互いに頑張ろうな」

互いにエールの交換を終えたところで、闘技場内のAチームの元へと向かった。

総当たり戦をする相手達はすでに集まっており、準備運動に勤しんでいる。

俺が戦わないといけないのは、男三名、女二名。

男はいいが、女の相手か……。

結構戸惑うんだが……。

そんな俺をよそに、一人の黒髪短髪の男子が声をかけてきた。

「俺と初戦よろしく。あの清水に勝ったという実力、本物かどうか確認したくてね」

「ああ、いいぜ」

ちなみにだが、総当たり戦といってもさすがに全力で五人連続を相手にするのはキツイものがある。

そこで活躍するのが、“風船”だ。

なんでも総当たり戦の後に更に、クラス内トーナメントを行うらしいので、背中に風船を付けて割ったら勝ちというなんとも単純なルールだ。

まあ、風船を全力で割りにくるのだが。

「準備はいいかい？」

「ああ、OKだ」

二人の準備が整い、Aチーム内の男子が掛け声をかける。

「……………試合開始!!」

その声と共に対戦相手の男子は一気に畳み掛けてくる。
両手を俺にかざし、火炎を放ってくる。
弱い火炎を放つ理由は余力を残す為だろうが。
そしてそれはまさしく目眩まし。
放った瞬間、彼は身纏を纏い駆けた。

「もらい!!」

「ふう……」

身纏に霸弾を組み合わせるんだったな。
俺が使うのは奏の技。

足の裏から霸弾を放ち初速を上げ、身纏で加速する。
一回見て、一回体感し負けた技。
だから人一倍対策を考えていたし、人一倍理解している。
真似ることだってできるんだ。

「え……っ!？」

「逆にもらい」

彼の拳は軽々と空を切り、綺麗に立ち位置が入れ替わる。
姿が消えたように見えたのだろう。
彼は動揺し、完全に隙だらけだった。
俺は彼の言葉をそのまま返し、易々と風船を割ることができてしまった。

風船の炸裂音にハツとした彼だったが時すでに遅し。

「ああ、やられた……」と膝を地面に着き、ガックリと肩を落とした。

「ちよつとばかりナメてたよ……。
僕の負けだ」

その言葉は多分本当で、こんな風船ゲームでなければ俺に勝ち目などないだろう。

たまたまだが、俺は一勝をものにした。

Aチームの他の生徒達が戦っている間、俺の視線はその戦いになく、奏の試合にあった。

奏は易々と回り込み、刀で風船を割っていく。

対戦する相手は全く反応できてなく、奏の技がいかに速いかを物語っていた。

つまりだ、奏まで速くなくとも、それ相応に使える俺は有利なのか？と、考えてしまう。

考えてる内に、俺の番が回ってきた。

「よろしくね、坂上君」

「よろしく」

相手は幸か不幸か女性。

風船ゲームじゃなかったら、俺の紳士的な部分が出てきて、一方的

な試合になっていただろう。

「試合開始!!」

その掛け声を合図に、試合が始まった。

先程の男子とは違い、法術を撃つでもなく突っ込んでくるワケでもない。

ただジッと俺を見据えている。

でもそれは、“出方を伺う”というより“固くなっている”という言葉が合う感じだ。

ならば、こちら取る行動は法術などで相手の動きを見ることがじゃない。

一気に決めることだ。

「——!!!」

決めた瞬間、俺は一気に加速。

思った通り、彼女の反応は俺の動きについていけず、振り返ろうと動きに移そうとした時には、風船の炸裂音が響いた。

「速い……全然反応できなかった……」

彼女はただボーツと立ち尽くし、そう呟いた。
そんな彼女に、俺は歩み寄った。

「ガチガチだったのは、なんでだ？
そんな固くならなくても、良かったんじゃないか？」

「えっ？ 私、そんな固くなってた？」

彼女は全くといって見覚えのないと言わんばかりにそう言う。
気付いてないのか。

多分、経験値の差だろう。

毎日四六時中、全力でぶつかってくる相手と戦い続けてきたからな。
洞察力に関して、俺はある程度のレベルにまで達してるということ
だろう。

しかし、こんなところでそんなことに気付くことになるなんてな。

「君は無意識に固くなるのかもしれない。

だから、試合の前には一回深呼吸を挟むといいよ」

「ホントに？ やってみるね」

彼女は笑顔で「ありがとね！」と言うと、もう一人いる女生徒の
元に向かっていった。

俺なんか感謝の言葉はまだ重い。

勿体ない言葉だったが、やはり嬉しいもんだな。

総当たり第二戦、俺は勝利を手にした。

俺は闘技場によりかかり、全体を見渡す。

激しく繰り広げられる風船ゲーム。
そんな試合を見ていると、横から声をかけられる。

「坂上さん、調子はいかがですか？」

「吹雪ちゃんか、まあまあってところかな」

「ちゃん付けは止めて下さい。
そんな歳でもないのさ」

吹雪は凜とした表情で、視線をピッタリと合わせ言ってきた。
その表情はとも3つも年下とは思えない。
どこか……いや、全てを見透かしてるような蒼く澄み切った瞳。
これを言ったら吹雪は怒るだろうが。

「なぜ、刀を使わないのですか？」

「使わないもんは使わないから」

端的に答えた俺だったが、次に吹雪の口から出た言葉に、驚きが隠せなかった。

“怖いからではなくて？”

「——！！！！」

「すいません、余計な言葉でした。
忘れてください」

やはり吹雪には“視えてる”のか。
俺の全てが。

なぜ？

“理解”の力だろう。

なぜ？

気になったからだろう。

なぜ？ なぜ？ なぜ？

「吹雪……、どこまで俺を“理解”した？」

「私の力は“理解”したいと思う事象を理解するもの。

私が好む好まざるとに関わらず“何故”と思えば、答えは自ずと浮かんできます。

“理解”できますよね？」

「俺が“何故”刀を使わないのか……、を“理解”の力が教えたのか……」

「その通りです。完全に人を理解することは不可能ですが、部分的なものは理解できてしまう。

思っ、知っ、そこまでしてしまった以上、私は坂上さん本人の口から聞きたかった。ただそれだけです」

驚異的な能力“理解”。

吹雪は事象を理解できる。

逆を言えば、知ってしまったてはいけないことや、知りたくないことまで“理解”してしまう。

きつと、だからこそ、吹雪は俺に罪悪感を抱いたんだ。

「根本的な原因は理解していません。

ただ視えたのは、怯える貴方と真っ暗な、どこまでも続く“闇”です」

恐らく吹雪の力はストップパーをかけてる。

吹雪“が”ではなく、能力自身が自ら。

人の感情、その全てを理解した時、吹雪自身が耐えられずに壊れてしまうと“理解”しているからだろう。

だから、漠然としたイメージを伝えるのだろう。

「闇、か……。聞きたいと思うか？

俺の中にある闇を」

俺は改めて訊いた。

言うつもりはさらさらなかったけど、そう訊いた。

吹雪は無言で頭を横に振り、「私は知る資格がないので」と一言付け足した。

「知らない方が世の中いいこともある。

って、吹雪が一番分かってるよな」

「……はい。その通りです」

俯き、そう言った彼女の姿は、歳相応に見えた。

俺は無意識に手を伸ばし、柔らかく優しく、綺麗な蒼い髪を撫でていた。

「奏には、内緒な？」

知る必要のないことだから……」

吹雪は軽く頷き、「分かりました」と言ってくれた。

俺が抱えてる闇は、俺だけが知って、俺自身で解決しなきゃいけない。

そこに他人を巻き込むなんて、しちゃいけないんだ。

二人は沈黙の時を過ごす。

重いワケでも、暗いワケでもない空気だったが、それでも言葉を出そうという気にはならなかった。

そんな沈黙を破ったのは、やはり奏だった。

「お疲れ、京祐に吹雪ちゃん。
ちゃんと勝ってる？」

勝ち前提を笑顔で言う奏。

明るい笑顔は、凄く眩しく。

温かい気持ちになれる、そんな気がした。

「勝ってるよ。風船ゲームのおかげでな」

「私はいつも通りです」

「そっか、良かった良かった。」

吹雪ちゃんは勝つて分かってたけど、京祐も勝ってるのか」

「ちょっと待て、俺に勝てと言っておいて何意外そうに言ってんだよ!？」

反論する俺だったが、奏は冷静に「京祐は別に気にしてなかったくせに」と、言い返せない言い分をぶつけてきた。
確かに。そう思うしかなかった。

「ちなみに、私も京祐と試合したいからね？」

イタズラな笑みを浮かべて言う奏。

遠回しに次からも勝ってねと聞こえる。

勝てるかどうかなんて分からないが、それでもやる気が出た。
ついでに清水にもなんか言われたし。

「分かったよ。それなりに頑張るさ」

「うん！ 吹雪ちゃんも一緒に頑張ろうね！！」

笑顔で頷き、吹雪にもエールを贈る。

ちょうどその時、俺の番が回ってきた。

俺が「行ってくる」と言うと、二人が「頑張つてね」と後押しをしてくれる。

期待に、約束に……。

応えられるだろうか、俺は。

でも、できないじゃないじゃなくて、“応えなきゃいけない”気がした。

誰かに何かを求められるのは、嫌いじゃなかったから。

「坂上君、お手柔らかに頼むよ」

「こちらこそ」

次の相手は男。

熱くなりもせず、オドオドもしない冷静沈着なメガネの彼。

正直、この手のタイプが一番厄介だろう。

「試合開始！！」

「先手はもらおうかな」

メガネの彼は右手を俺へとかざす。
すると手のひらに風が収束していく。

しかも、その収束していく量と質が、風弾とは違う。

簡単に言えば、風弾は風の塊を相手に放つ。

が、彼のはまるで刃を思わせる六本の棒が、アスタリスクを形作っている。

接点が俺に突き出すように作られた風。

彼は柔らかな笑みを含ませて、言う。

「――六風剣!!」

風の接点が離れ、六本の刃が瞬間的に迫りくる。

直線的だが、その速力たるや尋常じゃない。

奏の技が使えなければ、恐らく避けるのは無理だっただろう。

俺は真横に自身最速で避け、彼を見据える。

「やっぱり速いね。僕の中で最速の法術だったのだけれど」

まだまだ余裕のある表情の彼。

先程の六風剣は様子見だろう。

当たればよし、当たらずともよし、といった感じか。

彼はどうも法術を駆使して戦うタイプの人間。

更に相手を分析し、どんどんと追い込んでいくのがスタイルだろう。

ならば――。

「次は俺から行かせてもらう」

俺は加速を使つて、彼の後ろを取る。

けどそれは彼の予測の範疇だった。

彼は顔と手だけをこちらに向け、風弾を放つ。

逃げる様にその場から離れ、また近付く。

彼はだんだんとスピードに慣れてきたのか、反応速度が速くなつてきている。

「簡単には割らせないよ」

「そうか？　割つてみせるよ」

俺は近付く。

今回は後ろを取り、一瞬止まってまた加速。

さつきから続けてきた後ろを取る行為。

これを布石に、反応した後の彼の後ろを取ればと考えた。

「だから割らせないと――……！！」

「――風弾！！」

彼は一瞬止まったところに反応し見るが、そこに俺はいない。
若干距離を取っている俺は、風船に狙いを定めて風弾を放った。

「しまっ——！！」

「た」を掻き消す様に、風船の炸裂音が彼の背中で響いた。

「僕の負けか……。まさかわざわざ反応させてからの隙を突くとはね。」

恐れ入ったよ」

「一か八かの賭けさ。保証なんてのはなかったよ」

そんな俺の言葉に彼は「それでも、君の賭けが僕の実力を上回ったのさ」と、悔しそうだが清々しい顔で言った。

「清水君に勝った実力は、やっぱり本物だね」

彼はそれだけ言って、闘技場の端に戻っていった。

徐々に俺への認識が変わり、本気でぶつかってくる生徒が増えてきた。

そう簡単に勝たせてはくれないだろうな。

法術も纏術も弱いのに通じるのは……。どう考えてもやっぱり風船ゲームだからだった。

残っている相手は男と女一人ずつ。
そして今まさに、その二人が戦っている。

二人が二人共に、槍使い。

その動きは酷似していて、同門というのが一目で分かった。
二人の力量が同じであることも。

「——火炎槍！」

二人は見計らったように、同じタイミングで槍に炎を纏わせる。

武器に転換属性を纏わせるのは、難しいのだという。

武器を自分の四肢の様な感覚が必要だとか。

その分、武器による高い攻撃性に加えて、更に威力を増すことのできるものだ。

互いの攻撃は、互いに避け。

男が三段突きをすれば、女は横に動いて避け。

女が男の隙を突き、渾身の一突きを放てば、男はしゃがんで避け。
槍に纏われた炎から離れた火の粉が、辺りに舞い激しい戦いに色身を添える。

表情は至って真剣そのものな二人だったが、それとは別に楽しそうな空気を放っている。

「最後の打ち込みだぜ？」

「望むところ！！」

二人は自身最高速度で真っ向からぶつかりあう。

二本の火炎槍が二本の線となり、やがて一本の線となる。

金属音が響き、風船の炸裂音が追う。

静止した二人の背中には、風船はなかった。

つまりは、引き分け。

「今回も引き分けか……」

「それ、私のセリフだから」

そんな言葉を交わして、笑い合っていた。

二人の試合は、こうして終わった。

二人は二回つつ負けている。

今回が引き分けになったことにより現在、初戦の彼が三勝一敗に二戦目の彼女が一勝三敗。

そしてメガネの彼が三勝一敗になっている。

そう、次の試合に俺が勝った時点で、総当たり戦の総合一位が確定するのだ。

しかし、ここで舞い上がってはいけない。

有頂天になった人間程、足下を掬われるものはいないのだから。

「俺はまだしばらくは休めるな」

二人が休憩を挟む間、他三名で当たってない者同士が試合を始めた。

しばらくして俺の番。

相手はさっきの槍術使いの男。

武器持ち相手はよくしていたが、それはこちらも持ったの話。素手での相手はそこまでこなしていないが、経験はある。

不安もあるが、自信もある。

さて、どうくるかな。

「よろしく頼む」

「こちらこそよろしく」

簡単に挨拶を済ませ、開始の合図を待つ。

「試合開始!!」

刹那。

彼は火炎を槍に纏わせ、一気にトップスピードまで加速した。

その光景たるや圧巻の一言に尽きる。

観戦している時とは比べ物にならない威圧と熱気。

奇襲にふさわしい、最高最速の一突き。

まともに食らえば防いだとしても、今の俺の身纏じゃ意識が揺らぐだろう。

距離を取って避けるという選択肢もあるが、相手がここまで真っ向からくるなら。

男として、なるべく真っ向からぶつかってみたい。

「ハアアアアッ！！」

雄叫びに似た威勢を帯びた声。

俺はしっかりと向かい来る矛先を見据え。

最小限の動きで身体を横に向ける。

腹部のすぐ先を炎を纏った矛先が通りすぎ、その時を見計らって柄を掴む。

彼の身体が完全に止まったのを確認し、今までの進行方向に向かって掴んだ柄を力一杯動かした。

「うわっ！？」

案の定、彼はバランスを若干だが崩す。

そこを見極め、風船めがけて拳を振るった。

綺麗な動き。

頭の中でのイメージを、完璧に近い形で具現化できた。

その証拠となる音が、耳に届いたのだから。

クラス内トーナメント

なんだか知らぬ間に、一位になった俺。

奮起したのは確かだが、なんとも奇跡的な一位。そんな感覚に浸っていると、奏が近づいてくる。

「京祐、おめでとー！！ トーナメント戦に参加決定だね」

「なんか勝てたな……。勝っちゃってよかったのかな？」

「もちろん！！ しかも、対抗戦に勝ち上がって力を認められれば、ランクが上がったりするし今の京祐にはいいと思うよ？」

そりゃいい。

天使Eなんてのを早く脱却したいからな。

せめて天使Aに、いや、天使Cくらいになりたいもんだ。ま、なるようになれだ。

「クラス内トーナメントを始めるぞ！！」

勝ち上がった五人は集まれ！！」

一条に呼ばれて集まったのは、俺と奏、吹雪。それと、他二名の男子。

「それじゃあくじ引きするぞ。」

一回戦、準決勝、決勝の三回だ。
シードを引き当てれば、準決勝に負けても本戦出場決定になるからな。

まあ、クラス内一位なら本戦トーナメントで良い位置からの試合になるから、シードでも負けていいってことはないからな。
各自、くじを引いてくれ」

できればシードで。

とか思う時点で、大体シードじゃないのがオチなのは知ってる。
気を引き締めて、くじを引く。

引いたのは、E。

なんか俺自身を指してるみたいで嫌だ。

そのまま一条に報告を済ませ、皆の報告が終わると、まずシードから告げられた。

「シードは坂上。一回戦は想律 対 坂井、柊 対 伴原だ。

ルールは風船を割ったら勝ち。

だが、今回は風船の位置を固定させてもらう。

互いの後方に風船を設置するからな。

相手を戦闘不能にしてから割ってもよし、相手を掻い潜って割ってもよしだ。

方法は各自に任せる、以上だ。

何か質問はあるか？」

的確かつ簡略化された説明に不足などなく。

誰も質問することなく説明は終わった。

というか、俺、シード？

いいのか、それは。

この時点で俺の本戦出場決定。

神様って奴は、やけにお戯れが好きなのだろう。

こんな俺を本戦なんかに参加させるんだから。

そんな思っている、一条の声が闘技場に響き渡る。

どうやら奏の試合が始まるようだ。

「試合開始!!」

観客と化したクラスメイトの歓声と熱気。

反対に二人の間には、静かな空気が流れ、満ちていく。

奏は刀を握り、坂井は槍を構える。

どちらともに法術を使う様子はなく、恐らく武器同士の戦いになるだろう。

坂井がジリツと左足を前に出す。

動くかとも思われたが、先に動いたのは奏。

速力を爆発的に上げ、一気に迫る。

その迫り方は攻撃ではなく、勝ちへと迫る動き方。

坂井を避ける様に、くの字に動いたのだ。

「ハッ!!」

しかし、坂井も勝ち上がってきただけある。

戦いを避け、風船に迫る奏を確実に捉え、槍の一突きをお見舞いする。

「クッ!!」

奏もそれに気付き、刀の側面で槍の矛先をギリギリのところ受けて流した。

「簡単には割らせないよ」

「そうみたいね……ならッ!!」

「——ッッ!？」

奏自身最高最速の移動スピードに、坂井も驚くがそれも一瞬。すぐさま捉えにかかった。

奏自身、まだまだ力を温存させておきたいのか、執拗に坂井を掻い潜ろうとしている。

が、坂井もまたそれをさせまいと一突き、また一突きと奏の行く先を遮っていく。

「本気、見せてくれないか？」

その最中、坂井はそう口にした。

奏は動きを止め、坂井を見据える。

一方、坂井は身纏の濃度をより上げて、槍も纏わせていた覇気がその色、動きを変えていく。

「――風乱槍。これで、勝つ――！」

今までにない大声で。

勝利宣言を叫んだ坂井。

槍に纏うは、翡翠の色身を含んだ風。

矛先に向かって螺旋を描き、うねっている。

奏は一度、大きく深呼吸を挟んで。

「――火炎刀」

奏の持つ刀が纏うは、深紅に揺らめく炎。

その熱気は、周りの空気を歪めて見せるほど。

坂井の本気を見て、奏はそれに応えた。

ここからが、更に白熱する勝負になるだろう。

今回先に動いたのは坂井。

槍を携え、奏との間合いを詰めていく。

瞬き一つせず、彼の瞳は奏の姿を映し続け。

接触の瞬間、奏の姿の代わりに映し出されたのは深紅の世界。

携えた槍はいとも簡単に空を舞う。突撃し、奏に切り上げられた際に響く金属音は、坂井の耳には届かず。

気付くきっかけは、手に持っていたはずの重みが消えた時だった。

「な……っ!?」

「これが私の本気。」

風船、割らせてもらっね」

そう言うってから刀を頭上高くまで持ち上げ一言。

「――銃火槍！！」

地面に叩きつけてしまいそうな程、力強く振り下ろされた炎纏刀。纏われた炎が刀を離れ、一本の槍となり風船を貫く。

一瞬にして火に包まれ、風船独特の炸裂音は聞こえず、なんとも静かに戦いは幕を降ろしたのだった。

「勝負あり！！ 勝者 想律！！」

一条の宣言によって、今まであまりの戦いに息を吞んで観戦していた生徒達が、一気に声を張り上げた。

「いい試合だったぞー！！」

「坂井！ よく頑張ったあ！！」

「あ、ありがとう!!」

声をかける生徒達に、ペコツとお辞儀をする坂井。顔を上げると、奏の所に歩み寄った。

「本気、出してくれてありがとう。
自分の未熟さを改めて認識できたよ。
次こそは、勝たせてもらおうから」

「うん! その時はまた全力でやろうね!!」

どちらともなく、握手をする二人。
清々しいくらいの二人の姿は、“青春のページ”といった感じだろうか。

青春なんて俺にはなかった。

正確には青春の全ての時間を、強さを得る為に割いていた、と言った方がいいだろう。

今じゃ行使すらできない強さだけど。

まったく、無駄な時間を使ってたよな。

こんなにも綺麗で輝ける強さが目の前にあるのに。

「京祐え!! 勝ったよお!!」

「おう!! 見てたよ」

嬉しそうに駆け寄ってくる奏。

手を振りながら来るもんだから、なんとなく恥ずかしかった。

「お前、まだ力隠してたのかよ」

「京祐との試合の時は、剣術のみだったからね」

「あれも立派な剣術だろ？ 次は使えよな。
負けねえから」

俺が含んだ笑いで言ってみせると、奏は「私こそ負けないし」と笑い返してきた。

にしても、俺はなぜ刀を振れるのだろうか？

奏だけでなく、清水を相手にした時も。

覇気によって“斬れない”と分かっているから？

いや、そもそも人を相手に刀を握ること自体できなかったはずだ。

心の変化？ あるはずがない。

まあ、なにも変わらない。

変わらない。

「ほら！ 吹雪ちゃんの試合が始まるよ、京祐！！」

肩を叩かれ、奏の指差す方向に目をやると、すでに二人は対峙し合図を待っていた。

吹雪は構えるわけでもなく、ただ立って合図を待ち。
伴原は剣を握り、吹雪を見据える。

「試合開始！！」

合図と共に吹雪は歩み始める。

一方、伴原は剣を握る手に力を込めて、駆け出した。

「ハアアアツツ！！」

覇気を纏わせた剣を縦に振り抜き、覇気のみを斬撃として飛ばす。
しかし、吹雪は歩みを止めないまま、少しばかり右にズレる。
するとどうだろう。

覇気の斬撃は、吹雪の左肩スレスレを通過した。

「これならどうだ！！」

歩み寄ってくる吹雪に対し、今度は横風ぎに斬撃を飛ばす伴原。

吹雪は一瞬立ち止まり、また歩きだす。

歩いている吹雪の目の前。

そこを、これまたスレスレで斬撃が通過。

伴原は吹雪の移動速度を読んで、進行方向に向かって斬撃を飛ばしている。

先ほど、吹雪が立ち止まったことにより、タイミングをズラされていた。

「やっぱ、吹雪ちゃんは強いねえ」

「あれって能力使ってるよな？」

「うん。多分、吹雪ちゃんは伴原くんの攻撃パターンと攻撃ラインを“理解”してると思うよ」

「当たらねえワケだな」

伴原の動きを理解している吹雪にとって、風船までの距離はそこまですぐで遠くない。

どこでどう動けばいいのか。

それを分かっているからこそ出来る芸当だろう。

悠然と、軽い足取りで吹雪は伴原の前まできた。

二人の距離は、2メートル弱。

剣では届かないにしても、近い距離だ。

伴原が取る行動は一つ。

左手を吹雪にかざし、覇気を収束させていく。

「——風掌打!!」

平手の状態に風を纏わせ、更には打ち出した。

風撃並みの威力があり、スピードもあるが範囲が狭い纏術、それが風掌打。

本来ならば、相手に平手打ちをする様に打ち込むらしいのだが。

吹雪はスツと右手をかざす。

ただ無言で、右手に風が纏われる。

直後、伴原の放った風掌打が右手に衝突。

二つの力は相打ちとなり、消えていった。

それを見た奏が「…出た」と口走った。

「出たって、何が？」

「吹雪ちゃんの十八番技だよ。

相手の術の威力、角度、属性……、それらを理解し同質同威力を、真っ向からぶつけて相殺させるの」

「無敵じゃん」

「無敵なんかじゃないよ？

自分の覇気量を超える術がきたら、相殺できないし」

「あ、そっか」

そんな話をしながら、二人の試合の行く末を見守る。

吹雪と伴原の距離はすでに超近接的距離。

伴原は剣を振るうが、吹雪はヒラリと躲していく。

“理解”その能力の驚異的な力を目の当たりにしている。

理解の範疇を超えることが出来なければ、吹雪には勝てないだろう。

まあ、熾天使とかは理解の範疇を軽々超えるんだろうが。それでも、学園内じゃそうそう居ないだろう。

「やっぱり強い……ねッ!!」

言い終えると同時に、攻撃の手を速める伴原。

そんな攻撃でさえも、吹雪は紙一重の距離で躲していく。上体を反らす、しゃがむ。

吹雪は平然とした様子で、躲している。

観客と化したクラスメイト達も、息を呑み食い入るように見つめていた。

「ふう……、なら、これが最後の攻撃にするよ」

伴原は攻撃を止め、切っ先を地面に向けて柄を両手で持つ。

「避けられるのなら、避けられない攻撃をすればいい。

これは僕だけのオリジナル」

「——!!」

伴原の纏う覇気の濃度が色濃くなる頃、今まで顔色一つ変えなかった吹雪の表情が、少し驚きの色に染まった。

「――嵐覇!!」

切っ先が地面に刺さり、瞬間的に伴原の覇気がドーム状に広がる。ただの覇気ではなく、それ全てが幾十の風の刃となって吹雪を襲う。

吹雪はすぐさま両手をかざし、一瞬にして巨大な六風剣を精製。

接点をそのままに、後方の風船と自身を守る盾として使った。

まるで金属同士がぶつかっている様な高音が響き、辺りに強風が吹き荒れる。

嵐の様な風の攻撃は徐々に収縮していき。
やがて軽やかな風の流れと共に消えた。

「ハア……ッ、ハア……ッ」

伴原は剣を地面に突き立てたまま、膝を付き肩を揺らして呼吸を荒くしている。

相当な量の覇気を使つての攻撃だった様だ。

「試合終了!! 勝者 柊!!」

誰もが息を呑み、静寂に包まれていた空間の中。

よく通る声で、一条は試合結果を告げた。
改めて場を見渡してみれば、吹雪の風船はゆらゆらと先程の風の影
響で揺れており、伴原の風船はもはや形を無くしていた。

360度の攻撃範囲だったが故に、自らの風船をも割ってしまうと
いう結果だった。

恐らくは、引き分けを狙った攻撃だったのだろう。

「やっぱり……ダメ……だったか……ッ」

息を切らしつつも、そんな言葉を吐いた伴原。
それを聞いた吹雪は、ゆっくりと口を開いた。

「さすがに危なかったですよ。」

予期せぬ攻撃でしたし、初めてみる術でしたから」

「少しは……焦ってくれたかな……？」

「あの術が一点集中型であつたら、もっと焦ってしまったところで
すよ」

吹雪の言葉を聞いた伴原は、フツツと笑ってみせ。

「まだまだってことか……」と、納得した様な表情を浮かべた。

吹雪は伴原に手を差し伸べ、疲れ切っている伴原は素直に手を取った。
グツと力を込めて立ち上がり、「ありがとう、もう大丈夫だから」と言つと、伴原は刺さった剣を引き抜き、観客と化した生徒達の元へ歩いていった。

「勝ち残った者はこっちにこい。
改めてくじ引きをするぞ?」

残ったのは、奏に吹雪、そして俺。
どちらにしても本戦確定の三人なのだが、トーナメントは終わらない。

二人の試合見てみた感想はこうだ。
刀無しの俺が太刀打ちできるもんじゃないってことだ。
さて、どうしたもんかな……。

「よし、お前ら各自引け。
赤い印があるくじがシードだからな」

なるようになれ、だ。
その気持ちを持って、くじを引いた。

「私がシードですね」

吹雪がくじを一条に返すと同時にそう告げた。
つまり……。

「京祐、絶対に負けないからねえ」

奏との試合が決定。

小悪魔的な笑みを浮かべる奏。

間違いなく、本気でくるな。

なんとなくだけど、そんな予感がした。

奏との試合再び

目の前には奏。後方には風船。周りは観客。

そして俺の手には、一振りの刀。

やはりというか、分かつてはいたが奏から使つてと渡されていた。奏も刀を持ち、軽く何度か空を斬って一条の合図を待っている。

「試合開始!!」

その合図が聞こえ、奏が覇気を纏わせていく。

真っ直ぐに俺を射抜く眼光。威圧。

全てを奏が本気だと物語っている。

観客達も、そうそうは見ない奏の本気に、ただ静かに行く末を見ている。

俺は刀を抜くと、自身もまた覇気を纏わせて奏が動くのを待った。

「京祐、絶対手なんか抜かないでよ？」

「抜いたら後で怒るだろ？」

「分かつてるじゃん」

おおよそ本気の試合の会話ではないが、伝わり流れる空気はピリピリとしていた。

刹那――。

奏がトップスピードで突っ込んできた。

けれども、以前よりは確実に遅い。

まずは準備運動とでもいったところだろう。

右下からの袈裟切りを威力の無い出鼻を押さえる。

金属音が響き、その後奏は距離をとった。

「まだまだッ!!」

先ほどより速く、そして俺の真横より若干後ろぐらいだろうか、死角からの攻撃。見えた動きからの予想でしかないが。居合いではなくそのままに、右側に振り抜いた。

「――さすが!」

俺の刀が防がれたと同時に、奏から賛美の言葉を受け取った。

「そのスピード、初めての試合ん時のスピードだろ?」

奏の性格からして俺がどこまでついていけるか、知りたいと思って

いるはず。

だからこそ、俺はそう訊いた。

奏は驚くことなく、満足そうに笑顔になり。

「大正解！！ さっすが京祐え」

まったく。

奏は楽しませてくれるよ。

でも、そろそろだろう？

本気を見せるのは。

「準備運動はこれくらいでいいんだろ？」

「そうだね、じゃ、本気いきますか」

笑顔から一転、表情から見て取れるものは集中。

刀に纏われ、揺らめくは炎。

炎纏刀――。

奏の胸の内にたぎる闘志の様に、揺らめく炎はその火力を増していく。

「ちょーっと熱いから、気をつけてね、京祐？」

「熱いところで済めばいいけどな」

そう苦笑いを決め込むと、俺もまた集中力を高めた。
どうくるのか、はたまたどれくらいの強さなのか。
炎纏刀を使う奏の戦術は？

気をつけるべきは銃火槍に留まらない。

だからこそ、攻めねばならないと俺は先に動いた。

奏から盗んだ技で奏の背後を取っ――。

「甘いよ、京祐」

「――！！」

た。つもりだったのだが、まるで読まれてた様に、俺は背後を完璧に取られていた。

すぐさま振り返り、防御に徹することしかできなかった。

横風ぎに振られた炎纏刀。

ギリギリのタイミングで間に合った防御。

力ならば俺のが上だと自負していたはずだった。

しかし結果は防御していた俺の体勢を崩すほどの威力で、危つく吹っ飛ばされそうになる。

「炎纏刀を甘く見てたでしょ？
ただ炎を纏ってるだけだって」

奏の言うとおり。

俺は炎纏刀を甘く見ていた。

「かもな。まさかここまで強いとは思わなかった」

「炎纏刀の最たる力は威力そのものをあげること。力の弱い私にはピッタリでしょ？」

俺が思う剣術家、奏の弱点は二つあった。

一つは精神力の脆さ。

そしてもう一つが、腕力だ。

その一つの腕力が補われたということは、相当なステップアップを意味している。

気を引き締めていかなければ、瞬殺に近い形でやられるのは明白。

「やっと本気になったね、京祐」

「どういうことだ？」

「だって、さっきまで瞳の色が黒かったもん。今、銀色になったからさ」

なんだそれは。

瞳の色で本気度が分かる？

すごく致命的な気がするようないような。

でも実際問題、気を引き締めてかかろうとしていた俺。それに呼応して変わった瞳の色。

まあ、今更考えたところで変わるもんじゃないか。そう思い、苦笑いをこぼした。

「本気……か。なら一言言わせてくれ」

「なあに？」

「坂上流居合い。低く見れば、ケガじゃ済まないからな？」

「京祐こそ、私を低く見ないでよ？ 私だって剣術家のはしくれなんだから」

お互いに微笑を浮かべ。

高揚する気持ちを、そのまま静かで鋭利な闘志に変える。柄に手をかけ、一つ息を吐いて。俺は奏をしっかりと見据えた。

奏はグツと柄を持つ手に力を込めて。

見据える俺を確認しつつ、一瞬で視界の外へ。

能力を使っただからこそ、分かるスピード。

使わなかったら、常にギリギリの戦いになっていただろう。

奏は横から飛び込み、真上から斬り掛かってきた。

スピードに体重、炎纏刀の力をフルに使った一撃だ。

迎え撃つは居合い。

切り上げた瞬間の競り合い。

奏の一撃を止め、金属音を響かせたのはほんの一瞬。
すぐに奏は距離を取り、さらなる攻撃に転じてくる。

「すげえ……なんだよこれ……」

「想律は分かる。けど、なんで坂上はついていけないだよ……」

俺達の動きに観客席から、そんな声が聞こえてくる。

俺だって能力がなきゃまるでついていけない。

それほど、奏のスピードは群を抜いている。

「——銃火槍!!」

俺の真後ろからの攻撃。

反応し、振り返り。

目の前まで来ている銃火槍。

それでも尚、間に合う。

それが、居合いだ。

銃火槍の位置を確実に捉えた一撃で、炎を掻き消すことが出来た。
しかし、それこそが奏の狙いだった。

「——!!」

銃火槍を防ぐ為に放った居合い。

その瞬間を見計らい、奏が懷に飛び込んできたのだ。

本来ならば隙だらけだろうが、俺にはまだ居合いができる。

鞘無し居合い、空刀。

奏もそれを知っているはず。

なのに飛び込んできたのは、空刀居合いならば打ち勝てると踏んだからだろう。

確かに万全な居合いではない。

ではないが、それを万全に近いレベルまで昇華させたのが空刀。

右手に持つ刀に左手を添えて、斜め下からくる袈裟切りを上から切り伏せる。

ガチガチと震え、拮抗する二振りの刀。

どちらともに譲らない。

数秒間の競り合いを制したのは、俺。

奏の刀を後方へと弾いた。

弾かれたことにより、奏は体勢を立て直すべく距離を取ろうとする。そうはさせない。

奏の攻撃パターンは、大体だが掴んでいる。

驚異的スピードによる攪乱と奇襲。

その為にはある程度、相手との距離を保たねばならない。

攻撃を弾かれたならば、すぐに相手から距離を取ろうとするのが、奏のクセとも言っていいくらいだ。

だからこそ、俺は追い縋る。

距離を開けさせない。

攻撃のチャンスは、ここしかないからだ。

そうそう何度も能力は使えない。

「ク……ッ!」

距離を取れないから、奏は小さな声を漏らした。

後ろ向きに飛び退く奏のスピードと、真正面に向かって突っ込む俺のスピード。

どちらが速いかと言われれば、俺だ。

「もらった……ッ!」

横風ぎに振り抜くと見せかけて。

刃を戻して、柄で腹部を狙う。

案の定、奏はそのフエントにかかった。

身纏の上から、体重を乗せて腹部に食い込ませた。

「グ……ッ! さすがだね……京祐」

腹部を軽く押さえ、少しだけ表情を歪めた。

身纏を使っただけでも、衝撃が吸収しきれないわけじゃない。
しかしながら、ダメージがそこまであるわけでもない。

「まだ隠してる力、あるんじゃないのか?」

確証はない。ないが、カマをかけてみる。

本気を出す、そう言ったのだからこんなもんじゃないはずだ。きつと、俺に合わせて力を出してる。

だから、カマをかけてみた。

「あれ？ バレてた？」

「やっぱりか。だろうと思った」

「えっ！？ 騙したの！？」

「“本気”って言ったろ？」

奏は少し困った様子になり、しばらくしてウンと頷いた。

どうやら決断できたようだ。

決意に染まる眼光。

今まで以上のプレッシャー。

奏は本当に遊び好きだな。

「もう少し戦っていたかったな。

京祐、こういう場じゃなきゃ戦ってくれないでしょ？」

出た。瞬殺宣言。

大抵この宣言をされると、まず間違いなく瞬殺されてきた俺。スピードはどうだろうか？

攻撃パターンは？

その威力は？

そしてそれは本当に“本気”か？

考えてばかりいるな、俺は。

これじゃあ、本当に瞬殺される。

思考を止めて、精神を研ぎ澄ます。

己自身を一振りの刀にする様に。

視界に映すのは、奏だけじゃない。

全体を見渡す様に、広く広く。

「見せてあげるね、京祐。

炎纏刀、昇華！！」

纏われ揺らめく炎が、一瞬火力を増したと思うと、そのまま刀の中へと染み込んでいった。

刀身は赤く紅く。

打ったばかりの刀の如く。

「これが私の最強の武纏刀。——焰帝刀。

火力も威力も、さっきのと比べないでね？」

「比べるまでもないな。

嫌な熱気がこっちまで来てる」

奏はフツツと笑ってみせる。

後で聞いた話だが、武器に覇気を纏わせ、更に属性を変えることを

武纏というらしい。

纏わせる属性によって、その武器の長所を伸ばすことも、短所を補うこともできるとか。

火なら威力を、水なら重さを、風なら殺傷力を。

色々あるらしいが、今の俺には到底使えない術なのは確かだった。

「——炎舞!!」

先に仕掛けたのは、奏。

一振り、また一振り、と空を切っていく。

まさしく舞なのだが、見惚れてるワケにはいかない。

振られるたびに、炎の刃が一本、また一本と迫ってきているからだ。

後ろには風船。避ければ、負け。

かといって、掻き消せるかはわからない。

銃火槍よりも、数も火力も格段に多いし強いだろう。

—— やってやろうじゃねえか。

ここで引き下がれる程、俺は弱いなんて自覚はない。

全て叩き斬って、攻撃に打って出る。

姿勢を整え、鞘に左手を柄に右手を。

最大限の居合いで、迎え撃つ。

炎の刃の数は三本。

居合いから空刀、もう一度空刀。
そう思っていたが、迫る刃の間隔が狭すぎる。
これじゃあ、間に合わない。

「居合い……真閃」

だから使うは、この技。

坂上流居合い術の中で最速を誇る抜刀。

ギリギリまで刃を懐に招いて、一振りで掻き消してみせる。

———
今だ！！

熱気が襲う距離まで引き付けて、抜き放った。
炎はその形を変えて、拡散する様に消えていく。
上手くいった———と思った。
その時。

「京祐の負けえ」

そんな可愛らしい声を追う様に、破裂音が響き渡った。

「……しまった……」

奏の姿は俺の前には無く。

既に焔帝刀すら消した彼女は、俺の真後ろ、風船の位置に立って笑顔を溢していた。

炎舞は完全に囷だったってワケだ。

綺麗にしてやられた。

「勝者、想律!!」

勝利者宣言と共に、闘技場は歓声の渦に吞まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141/>

SiLveR eYeS

2011年10月7日01時42分発行